

表紙 野村嘉代

## Contents 目次

### 06 特集1 「紅をさす」ギャラリートーク

- |                      |         |
|----------------------|---------|
| 取得困難?イメージ世界へのパスポート   | 辻牧子     |
| 【interview】野村嘉代さんに聞く |         |
| アートと対話の可能性           | 聞き手 高橋綾 |
| 身体性の逸脱と特権性の喪失        | おのさやか   |
| ダイアログの快楽~オイラのびょん吉編~  | 尾崎大助    |
| 作品について話すこと           | 江川久子    |

### 25 特集2 岩下徹ダンスワークショップ +哲学カフェ=アートコモンズでの試み

- |                        |          |
|------------------------|----------|
| 報告 ダンスWS+哲学カフェ         | 桑原英之     |
| 【interview】アートの場、場のアート |          |
| 川井田祥子さんに聞く             | 聞き手 桑原英之 |
| ダンスと哲学する               |          |
| 哲学カフェでからだに耳をすます        | 古後奈緒子    |

### 36 特集3 神戸アートアニュアルからひろがった活動

- |                     |       |
|---------------------|-------|
| 神戸アートアニュアル2003に参加して | 高嶋麻衣子 |
| アートとコミュニケーション       | 山本麻紀子 |
| アーティストの授業風景         |       |

### 42 特集4 パリのシネフィロ報告

- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| シネフィロ(哲学シネマ)とはなにか | ダニエル・ラミレス |
|                   | ／訳 本間直樹   |
| 私がシネフィロについて知っている  |           |
| 2、3の事柄            | 本間直樹      |

特集  
アートが開く  
コミュニケーション

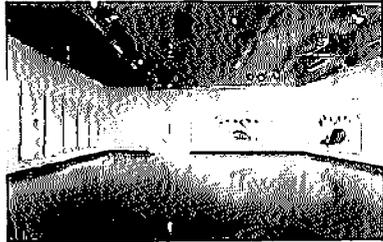
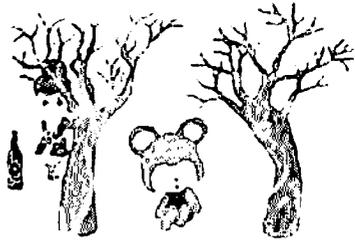


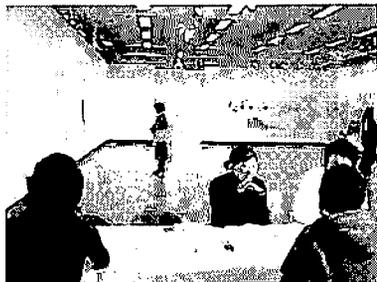
イラスト 山本麻紀子

今回の特集はアートが開くコミュニケーションと題して、絵画、ダンス、映画といった芸術が持つ力に刺激されて生み出されたコミュニケーションの現場からの報告をお送りしたいと思います。

臨床哲学研究室では、哲学カフェ、ソクラテイク・ダイアログなど、哲学の専門家ではない人々とさまざまなテーマで哲学的な対話をする試みをおこなっています。こうした対話では、「言葉」が中心的な役割を果たしてきました。言葉で与えられたテーマに基づいて、言葉で語られた経験を共有することから参加者が共に考えることを始めます。海外では、こうした言葉だけではなく、哲学的な対話のテーマとして映画や、絵画を用いるということが行われています。（これについては、フランスで映画を題材にした哲学カフェ、「シネ・フィロ」を行っているダニエル・ラミレスさんから寄せられた文章とシネ・フィロレポートによって知ることができます。）今回のメチエは、絵画やダンス、映画など、感性的な経験を共有することをもとに対話することについての特集です。

2003年10月には京都造形芸術大学内のギャラリーでの展覧会「紅をさす」において、われわれ臨床哲学研究室のメンバーがファシリテーターになって観客参加型のギャラリー・トークを行い、同11月には大阪の應徳院で開催されたイベントではダンスワークショップに接続して哲学カフェが行われました。これらの企画に参加してくださった皆さん、ア





ティスト達から、アートをテーマにした対話の感想がよせられています。感じることを言葉にすること、アートに誘発されて生み出される対話のダイナミクスをそれぞれが個性的な表現で切り取ってみせてくれました。また、アートを題材にした対話というような活動から出発して、地域に根ざしたコミュニケーションの場をどのように作り上げていくかということについて、臨床哲学の活動にも場を提供して下さっている應典院のスタッフの方へうかがうことができました。

院生の中には、展示会の企画にボランティアとして関わることを通じて、哲学を学んでいる学生がアートの現場でなにができるのかということ考えた者もいます。彼女の感想は現場にでることのとまどいを素直に伝えています。その後彼女はそこで出会ったアーティストと高校での哲学の授業を行うという形でさらに活動を広げていっています。高校生達は、しがつめらしい言葉のゲームよりも、日常のふとした場面に「おもしろさ」を見つけるアーティストの軽やかさに共感し、一緒に手や頭を動かしてひらめきを形にすることに面白さを見いだしたように思えます。哲学とアートが組むことによって何ができるのか、という問いに対してはまだまだ答えはできませんが、感性やからだにダイレクトに訴えかけるアートの力を借りることで、かたくるしい哲学的な対話は刺激を受け、活性化することは確かです。こうしたアートの力を借りて生まれた対話が「哲学的」と呼べるものなのか、そこまで深まっているかどうかはまだまだこころもとないのですが、こうしたアートと哲学が共に対話に取り組み試みはようやく端緒についたところ です。

今回の様々な企画は、アーティスト、展示会や企画を担当して下さった方、企画や演出にさまざまな形で協力して下さった皆さんとのコラボレーションで実現しました。今回の特集では、企画に様々な形で関わってくれた皆さんの感じたことを掲載するように努めました。そうすることによって、アートと哲学とのタグという異種格闘技的なこの試みが立体的に見えてくればと思っています。



特集 I 「紅」をさす  
ギャラリートーク

取得困難?  
イメージ世界への  
パスポート

辻 枝子

絵画のみならずアートを見ることはしばしば「旅」に例えられる。どちらも日常とは異なる時間を体験できる空間だからだろう。だが、大層な荷物とともに移動しなくては楽しさが獲得できない実際の旅に対して、アートではほんの少しの楽しもうとする姿勢と想像力で、どこへでも飛び立てるパスポートが手に入る。ところで実際の「旅」の仕方はこの十年で大きく変化したと云われている。こ

れまでは旅行代理店がお贈立するバック方式のツアーが出発前の面倒な手続きがいらす現地では見どころを効率的よく押さえられるということでも人気があった。しかし現在はまだまだバックツアーが主流とは言え、航空券や宿泊の手配やプランも自分で立てる個人旅行者が増えてきている。ガイドが案内するお決まりの観光スポットを見せられるのではなく、まるで自分も見知らぬ街の一住人になったかのような気分で見学を採り当てたいというのが、今の気分なのだろう。旅の楽しみの対象が、スベクタクル的なものから人の息遣いが感じられるようなリアルな時間の体験へと変化しているのだ。「人」と交わることがもつとも「現実」を体得した気分を味わえる異質な時間となったのかもかもしれない。

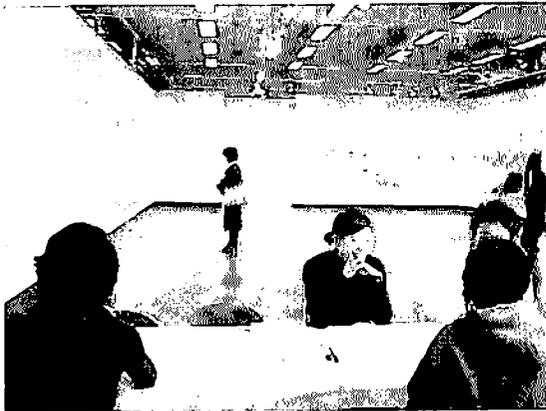
さて「旅」においては個人化が進む今日であるが、アートの鑑賞法にいたっては「ギャラリーツアー」や「鑑賞会」といったバック型がようやく定着しつつあるといったところだ。学芸員やアートボランティアがツアーコンダクターさながらに、作品の説明をしている光景をよく眼にする。これまで、アートの鑑賞は一部の人の楽しみであり、何か息のつまるお勉強だと捉えられてきた。このイメージの弊害に気付いた美術館やギャラ

リーがさまざまにアートの楽しみを広げる取り組みをはじめているからだ。

「紅をさす」野村嘉代、おのさやか二人展」の関連企画として、臨床哲学研究室（以下臨哲）さん、after school（以下asa）さんともに行ったギャラリートークもその取り組みの一端に位置するといえる。ただ本企画では、両作家の作品を解説する通常のトークではなく、「対話」を試みたかった。なぜならバック型の取り組みの多くが広範な人を対象とし、それゆえに対多数の学校の授業のような形態をとらざるを得ないことへの疑問をずっと抱いていたからだ。バック型の場合、主催側は明確なお得感を参加者に渡そうと知識の伝達で、アートの楽しみ方を伝えたような状態になることも少なくない。そして鑑賞者の側も「知識」ある意見を聞くことによって、講演を聞く直前まで自分が抱いていた感想をすっかり忘れたかのようになってしまうことまあるように感じていた。それは、手にいれかけた想像力のパスポートを放棄してしまう行為なのではないだろうか、などと叫びはしないが、トークの仕方によっては、作品を通じて創出される作り手、受け手の関係間におかしな溝をつくることもあるのかもしれないと思いついてきた。今回の試みは、だから臨哲の対話の方法を手がかりに、作家と鑑賞者と作品の有機的なつながりを探ってみることにあった。

トークは参加者同士の発言によってつくられる対話形式の第一部と、その対話を聞いて得た感想を野村、おの私が話す第二部によって構成した。第一部は、臨哲さんが通常カフェ&トークで行われているソクラテック・ダイアログ（以下SD）形式の対話型トークを応用し、ファシリテーター役も臨哲さんにお願した。両作家の作品からトークの対象となるものを各ひとつずつ作家同士が選定し、それぞれに一人のファシリテーターと十名程度の参加者が絵を囲むように座った。

SDでは、通常作品を見る経験の共有を重視し、ただ素材に作品をみた印象を具体的な言葉に代えていく作業から始まる。そして意見がおおむね洗い出されると、今度はそこから抽象的な観念を探るような「問い」をたてる作業を行う。おそらくSDではどのように参加者同士が「問い」をたてるかが、もつとも難しく重要な作業なのだと思う。しかし今回はあえてその「問い」をたてる部分は行わないことにした。トークの為に用意できる時間が限られており、駆け足に進行するのをさけるためであったが、結果的には作家に鑑賞者の「一生」の声を聞いてもらう時間を多くとることに繋がったと思う。そしてそれが、本企画で私が両作家に体験して欲しかったことなのだ。



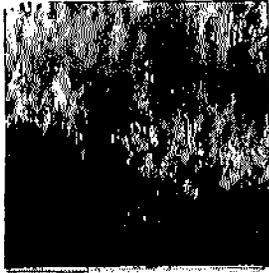
当然のことながら展覧会や作品に思い入れがあればあるほど主催する側、特に作家は緊張する。だからそうそうお客に対して市なうてかけられるものではない。それに、日本の美術作家の多くが教育を受ける芸術系大学では、作り手志望の学生がアートに対して余り面識のない方とのコミュニケーションはまだ少ないこともある。つまり作家は、全くアートの興味のない人と作品について話しをする機会に恵まれていないと言える。その一方で、昨今の「説

明責任)ブームは作家が作品を説明することがアートの社会性に直結するかのようには語られる。社会に少しでも関わり、そこに個人の表現を投げ出していこうと考えるこれからの作家の一人として野村とおのことがつづやいた一言はおそらくそんな背景があるのだと思う。本企画の発端ともなったその一言とは「作品について説明すればするほど、作品で表したかったことが逃げていってしまう気がする」というものであった。

では、鑑賞者にどのようなことばで説明をすることが作家にとってもベターなのだろうか。そのヒントはアートの専門用語が通じる者同士の中にはないはずで、「敵を知れ」というわけではないがまずは鑑賞者が使うことばを聞き、作品をみる視点を知ることから始めることもひとつの方法だろう。そこにおいて必要なのは、ガイドではなくファシリテーターだ。鑑賞者の意見を導き出し、グルーピングして道をつけつつまた迷走へと誘うスキルを臨哲さんに貸してはしなかった。今回臨哲さんに期待していたのは、鑑賞者が手にしたパスポートを存分に活用して何を語るのかを作家がじっくりと聞く場を設えてくれることであった。そして、実際そうしてくられたように思う。

トークは二グループでそれぞれの様子を見せ、「多様な意見」ということばでくくるのがもったいないほどだった。

ほんの一部を紹介すると、野村グループでは作品はタイトル「Under her skin」からの発想が大方だったのが、赤色に注目する意見から色や筆跡に興味があった。座る位置によって見え方がかなり異なったように体勢をいろいろ変え出した人もい



GTのテーマになった、野村嘉代「under her skin」47ページにカラーで掲載しています。

た。画面が揺れて見え、風の存在や時間を見る人いた。

おののグループでは、画面を占める老女にまず視線が集中した。大枠でおおあちゃんと名指されていたものが、老女が「いろっほい」と感じた人の意見から、首の傾け方などのディテールに視線がうつり、老女がほとんど分解されていった。

トーク中にはなかなかルールに馴染めない人もいて、さまざま不協和音も生じていた。しかし鑑賞する視線は縦横無尽で、他者の意見にとっても敏感に反応していた。他の参加者と概ね同じこと言う時でも、ことばの調子やちよつとした言い回しの違いにこだわりが出てきていた。その様子は、鑑賞者が対話を通して受け手という受動体から作品をまなびず運動体へと変化していく瞬間に私には見えた。旅の例えにもどせば、楽しみ処を全て教えてくれるガイドではなかったので、やむなく自分たちで現地の人に道を聞くうちに思いもかけない素敵な風景に出会うような楽しみを少しだけ共有できたのではない。

一方、第二部の両作家による感想トークは、第一部のトークにあった摩擦感を上手に引き継ぐことは難しかった。司会であった私が、話に絡ませる対象をよくばりすぎ散漫な印象を与えてしまったからだ。もつとトークで生まれていた「問い」のきざしにつっこめればよかったのだろう。だが、



同じくGTのテーマになった、おのさやか「うつつ(と)うつつでない夢」2ページにカラーで掲載しています。

両作家は自分の作品が全く知らないものになっていくような体験をとて前向きに捉えていってくれたと思う。改めて作家と鑑賞者は違う視点があると感じたことを参加者に丁寧に話していた。このトーク全体が対話であつたと言えとすれば、それは違ひの輪郭をそれぞれが受け止め、互いの意見に耳をすます姿勢になつたことだと思ふ。もちろん、本企画のみで無限の変数をもつコミュニケーションの方式に解答を与えることはできない。それに、言語・非言語表現がはらむ差異はとても深遠だ。だが、それをともに考えてみようかと誘える相手がいることが分ければ、面倒な手続きの多い個人旅行にだつてでかけやすくなるのではないだろうか。

#### 工場の哲学のメチ

ところで、当日は朝からa5aさんが会場内にカフェを設置した。飲み食いしながら、スタッフや作家、鑑賞者同士で話をしやすい場所を用意してくれたのである。本展にちなんだお菓子も用意するなど、これまでさまざまな人とともにアートの楽しみを増強させる試みを行つてきた経験をいかした演出だ。ギャラリーという空間でも話を楽しんで構わないことを観客にごく自然な振る舞いでデモンストレーションしてくれた。a5aさんと臨哲さんに共通するのは「一人への配慮」なのだ。私は確信している。

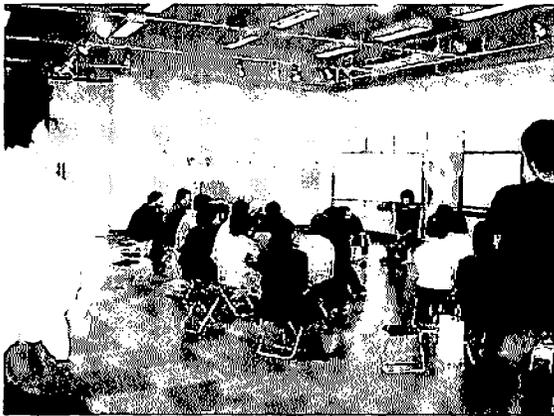
また、a5aのメンバーはトークをもっとも楽しんでくれた参加者でもあつた。メンバーの一人がトークの感想メールを送つてくれた。日常では気付かないような他者の意見と自分の意見がクロスオーバーする不思議な感覚について記されていたのだが、それは「対話」のまつただ中にいた者だけが感じ得たことだと思ふ。

複雑な構成となつた今回の対話はもしかすると「生」の声というような、生活と地続きのものではないかもしれない。だが彼の意見はトークの設えが仮設的な人間関係の構築や擬似的体験であつたとしてもそれらがつつたの嘘つばちのとはいえないことを教えてくれた。休暇で旅行を終えた人がリフレッシュして仕事にもどるように、このトークを終えた人々

が家路につく過程で現実と言われる世界に戻つた時、心の片隅で何かしらの微少な変化が起つたとしたら、それは毎日の生活を変える小さな力になるかもしれないのだ。

私自身も今回のトークを契機に心に引つ掛かり続けていることがたくさんある。ひとつには、やはりどうしてもギャラリーでの試みでは、トークに来てくれる人はすでにアートに何かしらの関心をもっていることが多いことだ。つまり、こちらが出向くわけではない以上（時には出向いても）、自分は全くアートとなんか縁がないと思つている人に参加してもらう困難さに改めて気付いた。お

そらく、そういう方にアプロチしたいと考えるのはとんでもなくおせっかいなのだろうが、それでも私がアートの楽しみを伝えたい方はなぜかこういった方々なのだ。確信させられた。それぞれの人の豊かな人生経験に裏打ちされたアートの見方への興味があくらみつづけている。この方々に振り向いてもらう作戦を一緒に考えてくれる人はたくさんいることがトークを通して見えたように思ふ。



そして、本企画を経験した両作家が今後どのように制作を続け、鑑賞者のまなざしと向き合っていくのかも気になるところである。野村は四月に個展を終えたばかりであり、アルバイトの傍ら制作に励んでいる。おのほ博士課程に進み、秋には個展の誘いがあるという。次のステップに進み出した彼女達の活動を読者のまなざしにもぜひ一瞥いただければと思う。もしかすると、トークが彼女達にもたらしただけかもしれない密かな変化に出会っていたのかも知れない。

最後になったが、長い準備期間をともにしてください、本企画のために最大限の努力を払ってくれた盛哲さん、a5aのみなさまに心からお礼を述べたい。ありがとうございました。

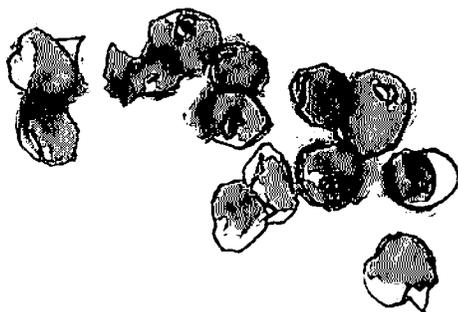
※本展レビニューが松下電機により運営されていた美術サイト TOWN ART GALLERY に掲載されています。御参照ください。http://www.hi-home.jp/gallery/art/101/04.html

つじまき)「紅をさす」野村嘉代・おのさやか二人展」  
企画運営担当

立命館大学政策科学部、京都造形芸術大学大学院卒業。現在は株式会社フライングネットワークに勤務神戸アートビレッジセンター1階のコミュニティースペース「Room」企画運営担当。学生時代よりアートの見方、アートとの繋がり方はもっとバリエーション豊かになるのではとの思い込みにとりつかれ、WSや展覧会の企画運営を行う。Roomでは臨哲メンバーさんと継続的な勉強会を開催計画中

※その他 Room 情報を知りたい方は info@roomまでタイトル「情報希望」本文「お名前、御住所、電話番号」を書いてお送りください。折り返しご連絡差し上げます。

## 【interview】 野村嘉代さんに聞く アートと対話の 可能性



聞き手：高橋 綾

絵 野村嘉代

### ● 絵を作るプロセスやモチーフ

i まずは野村さんの絵そのものについて少しお話ししていただきたいと思います。描くプロセスやモチーフについてですが、今回の作品は、果物がモチーフだと聞いていたんですが、これまでずっと果物というモチーフで描いてこられたんでしょうか。

野村(以下n) 特別果物だけにこだわっているわけではないのですが、物の「かたち」の面白さからいえば、やっぱり自然界にある形、植物の持つている「かたち」に惹かれる場合が多いです。花とかをモチーフにすることもありますが、今回はたまたま果物のモチーフでまとめたという感じですよ。

i 野村さんの作品は、花や植物「そのもの」を描いているわけではないですね。習作の段階で実物を写生するというのをなさって、その次に展覧会に出たような大きいサイズの、(はつきりモチーフの出でない抽象的な)作品に移られるというプロセスがあると思うのですが、その写生の習作と作品の間はどんな風につながってるのでしょうか。

n 習作は何十枚も描くのですが、最初は自分でもモチーフのどこにひかれたのかわかってないこ

とが多いです。習作はそれを描いていくなかで、自分がモチーフのどこに惹かれたのか、どこを面白いと思ったのかを発見する過程ですね。それで例えば色とか、形とか、その物の持っているイメージというような感じで自分の惹かれたところがはつきり見えてくると、大きなサイズに移ることになります。

i ちなみに今回のGT(※ギャラリートークのこと、今回の展覧会で行ったギャラリートークは通常のものとは少し異なるが、ここでは名称はそのままとする)の題材になった作品のモチーフはなんだったのでしょうか。

n もとにあったのはイチジクなんですが、食いしん坊ということもあって、イチジクがほんとに好きで、味も、形も存在感や手触り、木になっっている感じも、とりあえずかつこいいなって思っていて。イチジクのちよつとグロテスクな感じ、生々しい感じも面白いと思っていたし、またそれとは別に作品に関しては自分のなかの生々しい部分を出したいと思っていて、その二つの動機がリンクして、何を描こうと思ったときにイチジクが浮かんだんです。

i 写生してモチーフが固まってくるまでにどれくらい時間が?

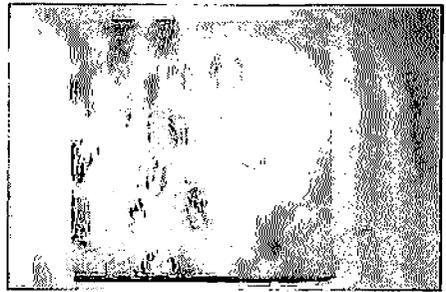
n 時と場合にもよりますが、今回は結構自分のなかでいろいろ蓄積されてたものがあった感じだったので、結構早かったと思います。たまたまってたものを出すみたいな感じで、結構衝動的に描きあげました。

i 前に野村さんが哲学カフェでみんなまで議論をするプロセスが、自分が絵を描くプロセスに似てるっておっしゃってたのを、私覚えてるんですけど。どのへんが似ているんでしょうか。

n 私もそう思ったことは覚えてるんですけど、ど・(しばらく思考中)・普段は見逃していたようなところを、一つ一つ拾っていった検証していくみたいなのところが似てると思ったのかな。身の周りのイチジクも普段普通に果物として見ているわけですが、そういうった普段の見方以外に、その果物に別の意味を見つけていく行為が私にとっては絵を「描く」ということなんです。それを描くことではなくて言葉でおこなっているのが哲学カフェのプロセスなのかな、と思っただけです。

i 野村さんが絵を描くとまっけて、どの程度言葉にして考えているものなんでしょうか。

n 考えているとは思いますが、ただ観念が先に立ってしまうと面白くなるので。もち



ろん自分がこう描きたいとか、イチジクがこうあるけどそのイメージを借りて自分の内面をこういうふうに表示しようというのとは最初にも思います。でも絵の具で描いていくと、自分が予期しなかったことが

画面に出てきたりして、それを利用したりもするので、自分の考えの及ばないところといったりということもありますね。最初に強い動機みたいなものがあるって、それに問いかけたりしながら、どっちのほうにすすんで行くかを探っているんですけど。

● トークと作家との関係

i 具体的にこのあいだのGTはどうでしたか？

n このあいだのGTはちよっと緊張する環境

でした。場所も広いし、二つのグループが隣り合ってた話に集中しにくい感じではあったし、なによりGTしてる後ろに、さらにそれを見てる観客がいるというのもちよっとやりにくかったかな、と思います。でも一番気になるのはああいう形のGTに作家も同席しているというのはどうだったのかな、ということですね。

i 私が思ったのは、トークの満足度としてはよかったんじゃないかなということですね。私たちのパートが終わって、それを辻さんが引き継ぐ形で「本物」のギャラリートークというか、作家のお二人とのトークというのをやってくれたじゃないですか。あれがあることによって、私たちのパートも引き締まったという印象を持ちましたけど。参加者のトークと作家のトークが両方あることによって、いいコントラストがついたかと思いたした。私たちが今までやってきたアートをテーマにしたダイアローグは単に話しかけておわりという形だったので、絵の見方が変わるとかっていう面白さはあったけど、結局これを話してなんになったのかという感想を持つ方もおられたと思うんですね。でも今回の場合は観客が話したあとに作家が何を考えているかということが聞けたのでよかったんじゃないかと思えます。やっぱり参加者は知りたいと思うんです。作家がどんな意見を持っているのかとか、自分の感じたこと、話したことを描いた人



右から順に、作家紹介をする辻さん、おのさん、野村さん

がどう受け止めてくれるのかというようなことを。だから後に作家のトークがあることによつて「受け取られた」感というのがあることによつて。観客が参加して発生したコミュニケーションが作家の人や辻さんによつて受け取られて、そこでまた続きが話されたという感じで。ああいう流れがあったほうが、もしかしたら参加者の満足度も高いのではないかな、という気がします。後半のパートの司会をしてくれた辻さんも、いろいろ話し合ったけど、最後の作家トーク

が最終的な答えなんだという印象は与えないようにしてくれたいと思うし。

n そういう意味では、トークの場に作家がいなくともその受け継ぎつてというのがスムーズにできにくい訳ですよ。

i 最後の作家トークで、おのさんは作家としての見方がはずされていく感じが面白かったみたいなのをいって来てたような気がするのですが、そういうふうに参加取っていただけなのであれば、作家の方があの場にいることにも意味があるのかなと思いました。あとは参加者の人が作家がいるということ、その人が答えを持っていくんじゃないかとか気にしなれば……。

n そう、準備段階でもかなり議論になりましたけど、参加者の人にとつて作家が後ろでじつと聞いているというのが、話している参加者にとつてはどうなのかなと思つて。

i 作家がその場においても、参加者が作家に答えを求めないで、対話に集中するということが可能だと思います。でもそれには司会の技量が必要かもしれません。

● 絵以外のテーマの可能性

i こういったGTって、どんなタイプの作品でもやって面白いと思われませんか？

n 具象画とかでやるのは難しいのかなとも思つたんですが。物の形やモチーフがはっきりしているものでもできるんですか？おのさんの作品もおはあさんというのわかるけれども、ちよつと非現実的な空間だったり、観念性が全面に出てきているので比較的話しやすいやと思うんですが。これがもし「静物画」とかだったらどんなふうな話ができるんだろうと思ひました。

i 私は写真でもできると思います。何が描かれているのか、モチーフについて話すのであれば、確かに具象画は離しいかもしれないけれども、でもモチーフ以外で伝わっているものってたくさんあると思うんですね。例えば色であるとか・前に「手」の写真でああいうトクをやつてみたんですね、それでもできました。手が写つているということは明らかにわかるんですけど、その手がどんな手かとか、ライティングとか、それはそれでできると思ひましたね。それも司会の難しさということに関係しているかもしれないですが。



n そう、話の広がり限定されるのかなと思っ

i そういう面もあるのかもしれませんが、でも抽象面だと広がりすぎて難しいところもあると思います。この前のトークも「私には…に見える」という人もいれば色彩のコントラストに注目する人もいたりで。

n あとはインスタレーションとかでやっても面白いかなと思いましたが。絵だとその前にかたまって座って一つのものを見てという感じだけど、インスタレーションだといろいろ動きまわって見ることができると、しゃべっている人も動き回れるからそれも楽しいかなって。一枚の絵の前に座って前に向かって絵や、黒板の方をじつと見てという感じがちょっと奇妙かなと思ったりしたので。

i 他にもダンスのワークショップのあとで今回のようなトークをするという企画があるので、それをやっている人にも聞いてみたいといけませんね。私の予想では、ダンスとかになると不確定な要素が増えるから難しくなるんじゃないかというふうな気もします。あと時間の流れのなかで成立するものは、ここがいつっていうのを止めて指摘することができないというのもあるし、でも、見る側のほうも動きながら感想を言うってというのは面白いかもしれませんね。

n インスタレーションとかのほうを受け止める方が様々だったりするので、感想を聞いてみたい感じがします。絵よりももっといろいろな見方が出てきそう

i 絵でもそうとういろいろな見方ができると思います。

n でも絵だとやっぱりその作品の枠の中だけで話が進んでしまうことが多いけど、インスタレーションとかだと（空間とか雰囲気とか）作品そのものの以外の要素にも目が向けられるのではないかな、と思います。

### ● 絵を描く経験と作品の見方

i 感想のなかでは、印象的なものとか面白いものとかありました？

n 一番初めに初めてリハーサルでやってみたときのことが印象に残っています。絵について「傷」という言葉がでてきたことはすごく覚えていますが。自分は描く側なので「傷」とは言わない。自分は描く側なので「ひっかき」と「つてとらえる」し、「道具はなんだろう」と思ったり、感触などがリアルに感じられるところがあるんだけど、そういう背景を持たないで初めて作品を見た人は「あつ、傷がある」ととらえるというギャップが新鮮でしたね。

i 絵を描いている人、描いた経験がある人が絵を見るのと、絵を描かない人が絵を見るのつてやっぱりちがうとらえ方をするんですかね？

n そうですねえ、絵を描いている人はその絵一枚だけでは判断しないというか。その絵はよ

くなかったとしても、可能性みたいなものについて話したりはすると思いますね。自分のような年では、まだまだ納得のいく作品は作れないのはあたりまえで、できた一枚の絵のなかに「次の絵につながるようなもの、絵の可能性があるかどうか」というようなことを話したりします。でも絵を描かない人っていうのはそういうところえ方はしないわけで、やっぱりこの一枚の絵がどうか、ということについて感想を言ってくれますね。そういう意味では（絵を描く人の見方も、描かない人の見方も）どちらも勉強になるところはありますね。ずっと作家同士、絵を描く人達のなかにいると、一枚一枚で完結しているという見方よりも、他の作品との関連性を考えた見方をしがちなので。（絵を描かない人に）一点一点がどうかかっていう感想を言ってもらえることもすごく嬉しいし、勉強になると思います。

i 参加者の方で美大の方がいらっしやって、その方は「即興で描いたのか」とかいう技法面のことに関心があつたみたいですが、野村さんが他の人の絵をご覧になるときも「モチーフはなにか」とか「なぜ赤をつかったのか」というような（書き手の側）に立つたような見方をされることが多いですか？

n そういう見方を作品によってはすることもありますが、やはり好きか嫌いかということと

ろから入るところが多いですね。「好きだ」って思ったら、この絵のどこにひかれたのか、とか自分の絵とどちらがうかなくなとか、この表現きれいやけどどうやって描いたんだろう、ということも考えたりはしますが、一番最初に持った印象というのを大事にしたいから、あまり技法面から入っていかないようにしたいとは思っています。美術館の雰囲気も大事だと思ってるので、なるべくすいているときに行きたいし、絵と絵の間隔や配置とか、見た人と作品がその場でどういいう出会いをしているかということも大事だと思います。

i 展覧会でも、「この一枚の絵」という感じでは見てないんですね。展覧会の雰囲気の間でとか、年代順の連続のなかで一つの絵をとらえているわけですね。

n 全体の流れのなかで一つの絵をとらえるという見方は常に行っていますね。さっきの話に戻りますが、自分でも描いていると「あつ、いいな」と思う作品がほとんどできたりすることもあるんですけど、それだけで終わってしまうことがあるんですよ。一回きりの「まぐれ」みたいな感じですね。私自身もまだ納得のいく作品というのはできていないんですが、それでもこの作品はけっこううまくいったなと思うものは、それ一枚がどうというよりも、それを描いたことに

よって次のステップ、作品につながり、それを描くことで次の構想が出てくるような作品ですね。

i じゃあ、「こういうのを次描いてみよう」という感じで、次の展開が見えてきた作品というのが、野村さんにとってはいい作品なんですね。

n そうですね。一個一個で切れていくのではなくて、作品自体も大事だけれど、描くことがつながつていくということが大事だから、それをいかにいい状態で保っていけるかということが大事な。

i 他人の作品に関してはどうですか？自分の作品に関しては、新しい見方が発見できたなとか、次につながるポイントとなるのがある作品だとして、他の作家の作品を見て「いいな」と思うときにはどんなところがポイントになつていっているんでしょう。例えば、野村さん白



身がその作品を見ることによってインスピレーションが湧いて、新しい作品ができてしまう、とかそういうことも「いい」という評価のうちには入ってくるのかなとは思いますが。

n そういうタイプのものもあるし、好きだけど自分には描けないと思うタイプのものがありますね。ぜんぜん違うけれども好きというのもあるし。でも、やっぱり作品がそれ一枚だけでは完結してないということが基準ですかね。その作品の外に可能性が広がっていくようなものに惹かれますね。こんな言い方は抽象的だろうか。ほとんど「感じ」の問題なんですけど。

i 例えばピカソ美術館でピカソの作品を全部見ていって、これがピカソのなかでは転機になった作品だからこれはいい作品だ、ということも違うように思うんですが、その「広がっていく感じ」というのはもう少し細かく言うとうどんな風になりますか？

n その作品でいっばいっばいっていうのではなくて、その作家の潜在能力みたいなものが感じられるものかなあ。そういうことを言葉にするのはなかなか難しいですね。

i こういうことをお聞きしたのは、アートをテーマにした哲学カフェでも時々そういうこと

を感じることはあるからです。どんな作品でも感想が出ることは出るし、いい作品か悪い作品かってどんな観点で区別したらいいのかな、つてたまに考えることがあるんですね。私が思うのは、いろんな見方ができる作品、いろんな人いろいろな感想を持たせる作品がいい作品なのか、という気もするのですが。

n どんな作品がいい作品かということの基準はいろいろあると思うし、その人が普段暮らししている中で何を大事にしているかということに関係してくるところはあるので一口には言えないけど、やっぱり絵を描くということは、かっこよく言ってしまうえば、その人の「生き方」ということだと思うんで……

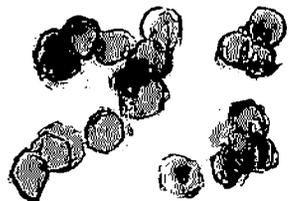
i いやっ、かっこよすぎ！

● 絵の経験を言葉にすること、他人と一緒に見ることに

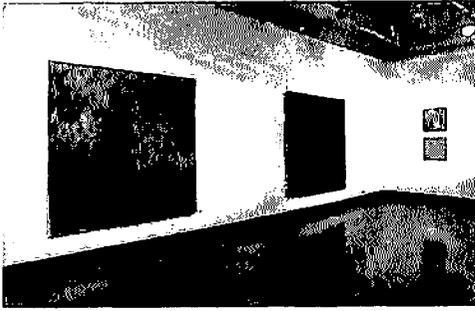
i 話は変わりますが、GTって、「絵の経験を言葉にする」ということが一つのポイントで、あともう一つは「他人と一緒に見る」というのがポイントだと思うんですけど、「絵の経験を言葉にする」ということについてなにか思うことがありますか？もうすこし言葉を付け足すと、絵を見る経験というのはそれ自身で完結していると

いう意見もあると思うんです。例えば、絵の経験を口にするってなにが抜け落ちる人も言いたくする人もありますが、そういう意見に関してはどう思われますか？

n あー、でも言葉が必要ないと全然思わないですね。言葉がビジュアルを助けてくれるということもあるから、絶対必要なことだとは思いますが、もちろん言葉だけでは成り立たないし、絵は絵だけで成り立つといえはそういう部分もあると思うけれども、でももつとそれ以上のものを生み出そうと思つたら、言葉というのは必要な気がします。作家として、言葉だけが先行するというのはいやなだけで、作品と言葉というののバランスをとりたいなあと思っています。ビジュアルだけほんと出してどうぞっていうのも、自分の作品に対しても、見る人に対しても失礼という感じがして、(作品プラスなにか自分で言葉で説明するなり伝えるなりして) 自分が描いたものを出して見てもらうというこの責任というのは果たしていかなきゃいけないのかな、とは思っています。それに絵を見て感じてい



絵 野村区代



たことを、言葉にしてそれでもっと実感できた  
りすることもあると思うんですね、だから「絵  
の経験を言葉にする」というのはいいことだと  
思いますけどねえ・・・

i 「他の人との一緒に絵を見る」ことに関して  
はどうですか？そんなことして何になるのと思  
う人もいるかもしれないですが。

n 合う人と合わない人がいるかもしれませんが  
ね・・・私はあの場にいたらたぶんしゃべれない  
気が。(苦笑)

でも作家と  
しては、その  
場において他  
の人の意見を  
聞くというこ  
うことがな  
にかしらす  
事なような  
気がします  
が全部ブラ  
スになると  
は言わない  
けれども、少  
なくともマ  
イナスでは  
ないですね。

そういうことで解放されていくということも大  
事だと思っし。

i 今やっているGTだと、絵を見ることを楽  
しむことの二環として、他の人の意見も聞いて  
みるというところが大きいと思うんです。観客  
として見るときには、いろんな意見があつたら、  
確かに楽しいという気はするし、見方が変わる  
ことが楽しいとかそういう見る側としての楽し  
さはあると思うんですが。作家の側から見ると  
どうなんでしょうか。今回のGTが作家として  
絵を描いていく上でなにか役に立つことはある  
でしょうか。

n 作者に直接の影響というのはないかもしれ  
ないけれども、そうやって見る人が少し絵に近  
づいてくれたり、(こう見なければいけないとい  
う思いこみから)解放されていろいろな見方を  
するようになってくれば、描く方の意識も変  
わるような気がします。せっかく描いても、「絵  
のことわからないんです」って言われるとさみ  
しいし、そうつづけばねるまえの手がかりとして、  
そういう見方でもいいんだという感じで絵に接  
してもらえる場があるというのは、作家として  
嬉しいですね。

● 作家と観客、作品と観客との関係

i 野村さんにとって、作家と観客との理想の  
関係とはどんなものですか？

n 理想の関係？？難しいですね。

i えつと、そしたら聞き方を変えると、人に見  
せるということとをどれくらい意識して描いて  
るんですか？「これ見た人はこう思うかな」とか考  
えて描いてます？それともあんまりそういうこ  
とは考えなくて描いておられますか？

n ずつと考えてるわけじゃないですね。でも  
絵が進まなくなった時とか分からなくなった時  
にはなるべく第三者の目になって見直してみよ  
うとはしたりしますけど。例えばそういう時  
は三日ぐらい絵を見ないで置いて、久しぶりに  
学校に来て絵を見る、とか、あとは逆立ちして絵  
を見るとか。(苦笑)まあ、そういう形で見ると  
の目というのを考えることはありますけどね。  
でも逆に描いている時に見る人のことを意識し  
ないと、絵が固くなってしまうんですよ。だから  
なるべく考えないように考えないようにして、  
そういう意味ではあえて意識してないようにし  
ていると思います。

i 自分の作品を「こう見てもらいたい」とい  
うのは強くなりますか？

n そうですね。私の作品というのはやっぱりジャンルでは抽象画に入るものなので、「抽象画はよく分からない」と突き放されるのはさみしいですね。だから、「この形がなにかは分からないけど、こう見える」とか、「形が単純におもしろいな」とか「この色が好き」とか「この絵よりはこっちが好きだな」とか、その人なりのきっかけで、それをみてなんかちよつと「ほわつと」して欲しいと……

i えつ、「ほわつと」してほしい？

n そうですね、私が絵を描いているからかもしれないけど、いい絵を見たりすると、いい映画を見たとみたいな感じで、世界が違つて見えたりとか、なんかちよつと気持ちがよくなつたり、逆にいるいる自分について考えたり、なんかそういうきつかけになれたらいいな、そういう関係が理想かなと思つていますね。いい絵を見ると、自分の感覚が開いていくような感じになるんですよ。そういうのが理想ですかねえ、作家と観客というより、作品と観客の関係ですが。

### ● 美術と教育

i 野村さんは美大を目指す高校生に教えるということもされているようですが、絵を教えるつて大変そうですね。

n そもそも教えられるものなのか、という疑問もあつて。私が言ったことがその人に後々影響することを考えると怖くなるから……あんまり「教えてる」という感覚はなくつて、一緒にやつているという感じですね。先生として上からものを言うということはないようにしています。でも私のほうがちよつと先輩だから、「こもうちよつとこうしたほうがいいよ」というアドバイスはします。でも同時に「こうしなさい」ではないんだよ、ということも伝えなければならぬと思つています。

i 芸大の先生とかはどうなんですか？

n ああ、でも芸大でも基礎的なことならちよつと、大学院とかになつてくると、やっぱり同じ絵を描いている人同士の先輩として色々アドバイスをくれる感じですね。だから「この絵はこはこうなれおしたほうがいい」というようなことはほとんど言われぬです。「こういう作家知つてる？」とか「この作家も見てみたら？」とか直接作品には触れないことが多いです。それで「この作品はどういう背景があつて描いたのか」とかそういうようなことをいろいろ話しているうちに、自分の考えがまとまってきたり、「そのあたりをつめていったらどう？」みたいなことになつてきて……というようにことがほと

んどですね。

i そうか、絵を描くことを指導するというのもなかなか大変なんですね。「こつと描きなさい」というのもおかしいですね。

n そう、答えがあるわけではないですからね。まあよくあることでですけど、作家として優れていても先生としては優れていないということもあるんでしよつねえ。

i ははは……

n 日本の美術教育ということで言えば、高校での美術の授業もなくなつてきているし、それが進んでいくと、絵を描く人と描かない人の接点なんてまるつきりなくなつてしまふんじゃないかな。高校の美術の先生とかも非常勤になつてきているし、授業数も削減されているし、ひよつとしたら高校生は美術大学というものがあつることすら知らないんじゃないかというような状況なわけなんです。

i いや、それは哲学もまつたく同じですよ。合理性の追求とかに主眼がおかれたり、不景気になること切られるという……哲学もそういう苦境に置かれていますね。

n 海外つてそうじゃないですよ。伝統が치가うし。

i そうそう。哲学もそうだけど、一般の人への浸透度とか土台の大きさがちがうんですよ。一目の置かれ方もぜんぜん日本の状況とはちがうし。

n だから、海外の学校みたいに、小さいときから美術館に見行つて感想を話し合うとか、そういうことがあつたほうがいいんじゃないかと思つて。

i そうそう、イギリスのテートモダンでも小学生か幼稚園生相手のGTみたいのをやっていましたね。結構高度なことをやっていましたよ。モネの睡蓮の絵の前で、縦線と横線がなんとか・・・というような話とかしてましたね。

n そういう試みが継続してされるといいですね。一回でもそういう経験があると美術に対する親しみの度合いがぜんぜんちがうし、壁を感じなくてすむし。壁を感じられるのが一番いいですからね。

i 日本の美術教育って知識しか教えないじゃないですか。美術史とか、これは誰の絵だとか、あとはなんでしたっけあれ、色味のサークルと

か。

n 色相環ね(苦笑)。

i そんなことよりも絵の感想をみんなで言い合うつていうようなことをしたほうがいいんじゃないかと。

n なんですかね、日本人の気質とかもあるんですかね。自分の意見をあまりいわないとか、知識をおさえてからじゃないと何もいわない、いえないみたいな。

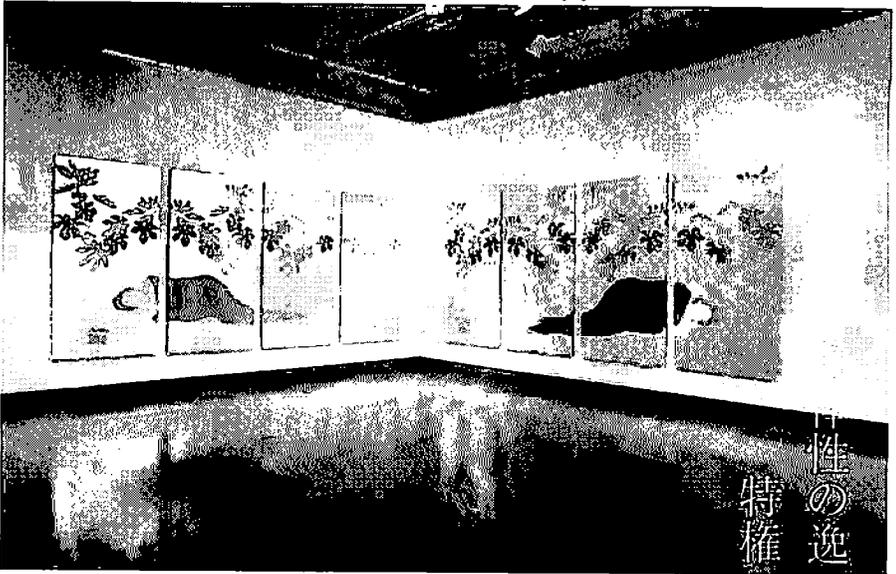
i 私は美術教育とかも、知識だけじゃなくつて、みんなが絵をみて話すとか、そういうバリエーションがいろいろあつていいと思うんですよ。それだけじゃなくつてアーティストの人が学校に来て、子ども達と一緒になにか作るとかいうことも、もつと頻繁にされていいと思うし。美術館に行くのもあつていいけど。

n そういふふうには教えることが表面的なことではなくつて、内容のほうまで踏み込むようになる、教える方にも覚悟がいるし、ちゃんとしてないとダメだし、そうすると教えることのできる人材というのが足りないということにもなつてくるんじゃないかと。

i そうですね。私たちの研究室でも高校の授業をさせてもらつたりということをしてるので、いままでの知識を教師が与える型の授業ではないようなことができないかなと考へていることもあつて、美術の教育でもそういうことが考えられるのではないかと思つていふのですが。

#### のむらかよ

兵庫県出身。京都造形芸術大学洋画コース卒業、  
京都造形芸術大学大学院芸術表現専攻終了。  
現在、京都、神戸を中心に油彩による作品制作、  
発表を行っている。2005年には、京都での個展  
を予定している。



## 個性の逸脱と 特権性の喪失

おのさやか

今回のギャラリートークは、ある明確な眼差しの違いを作者であるわたしに突きつけた。このギャラリートークでは、目の前にある画面から受ける印象のみで、絵画を言語化していくという制限が鑑賞者に対して共通に与えられる。つまり、作品の前にして得た鑑賞者の「ことば」を聴こうというのだ。

このギャラリートークでは、鑑賞者の身体を裏切るような巧妙なふたつの仕掛けがはたらいていた。ひとつは、作者は居ながらにして作品について語らないことである。なぜならばギャラリートークと云えば、多くの鑑賞者は作者の「ことば」を聴く態度で臨むものだからだ。もうひとつは、それぞれの鑑賞者が「絵画を観る」ことで得た「ことば」を持ち寄ることである。鑑賞者に「絵画を観る」という非言語的、あるいは前言語的な経験をあえて「ことば」にしてもらうのだ。「絵画を観る」行為はやはり「観る」のであって、「ことば」として語る行為に直結するものではないだろう。つまり、ここには鑑賞者の「聴く」「観る」という暗黙の身構えに対する裏切りが出現するのだ。

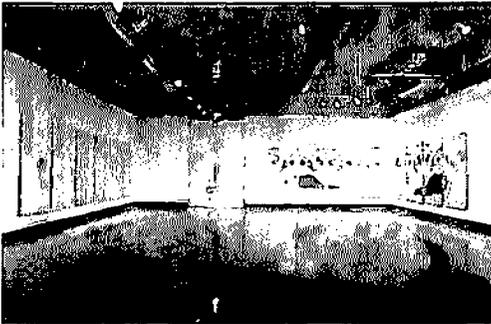
この裏切りが、鑑賞者のもつ鑑賞者という役割を逸脱させる。逸脱は「絵画を観る」行為における身体性を露呈し、「描く身体」と「描かない身体」の差異を出現させる。ある絵画作品をどのように観るかは、作者も含め様々である。しかし、「描く」行為を経験している身体は、絵画に対する記憶や習慣が、そうではない身体と比べて違いがあるのは事実だ。例えば、マチエールの層やタッチの筆跡を知らず知らずのうちに、わたしの身体が追体験していることはよくある。つまり、わたしたち

作者がそうした(描く身体)を備えた眼差して絵画を覗てしまうことにあらためて気づかされるのである。と同時に、(描かない身体)をもった鑑賞者は、目の前にある絵画の色やかたちをきつかけにそれぞれの記憶や習慣を手がかりに覗ようとすることに気づく。この身体性の違いが、同じ作品を前にしながら絵画への眼差しを大きく異にしている。描いているからこそ見えないものと見えるものがある。描いていないからこそ見えないものと見えるものがある。同じ絵画を覗るといふ地平のうえで互いの「ことば」を隣合わせることで、自らの身体性への気づきとなるのだ。

鑑賞者の「ことば」から得られたのは、それぞれが自らの記憶や習慣を手がかりに絵画を覗ているということであった。それは、作者も鑑賞者も絵画への解釈が個々人で異なるということである。だからこそ鑑賞することにおいて、作者の意図が必ずしも作品の見方だとは云えないのだ。「絵画を覗る」という振る舞いをするうえで、作者も鑑賞者も同じ地平に並ぶことになる。つまり、たとえ(描く身体)と(描かない身体)の異なりがあつたとしても、展示を終えた作品の前では「作者である」という特権性は色褪せてゆくのである。また同時に、「鑑賞者である」という特権性をも削いでゆくことになるのだ。しかし実際には、鑑賞者の特権性は失われたかのように見えて、決して削ぐことのできないものとして存在しつづける。なぜなら、鑑賞者は絵画に向きあう限り、「絵画を覗る」行為から逃れることができないからである。だが、作者は「絵画を描く」ことから「絵画を覗る」ことへと移行すること、作者であるという特権性を失ってゆく。つまり、作者の特権性とは、制作の最中にしか存在し得ないのである。こうして鑑賞者と作者の身体性を比較することで、かえって作者の特権性がより際立って見えるのである。作者、絵画、鑑賞者という三者の往復的關係を見据え、既存の役割から逸脱すること、絵画とひとの關係はあらたな飛躍への可能性を孕んでいる。つまり、作者は自らの作品の前で特権性を喪失したときにはじめて、あらたな特権性を獲得することができるのではないだろうかと思えるのである。

### おのさやか

京都造形芸術大学大学院博士後期課程



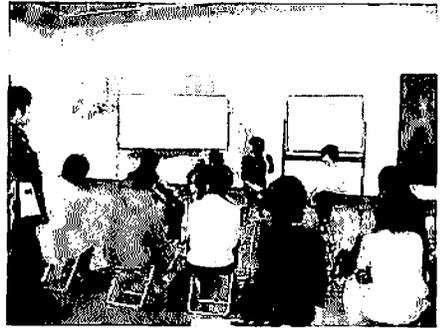
ダイアローグの快楽  
～ オイラのひょん吉編～

尾崎大助

本来ならばこの企画でカフエを運営したafternoonの立場から、私は書くべきかもしれません。しかし、私はafternoonを通じて自分なりのアートとの距離を探りたい、そしてそれを通じて作品との出会いを、企画との出会いを、人との出会いを満喫したいと思っています。ですから、今回出会うことができたダイアローグの感想を以下に書くことで、私からの言葉に  
かえたいと思います。

「ここに私じゃない誰かがいれたいのに」  
こ最近、作品を目の前にしてしばしばこう思うことが私にはあります。これは私の友人のえしさのせいではないと思います。なぜなら、十月十六日以来、そう思うようになったからです。きつと、ダイアローグのせいだと私はふんでい  
るのです。

一人で作品と向きあうとき、だんだん作品から受ける感じが変化する、ってなことはよくありました。ずーっと作品の前にいると、ほんのちよつとした彩度とか素材の質感に気がついて、作品が少し違ってみえる、こんな経験です。



作品を  
変容させ  
ていく快  
楽。作品の  
前に長い  
間たちど  
まること  
のできる  
比較的暇  
な人だけ  
が味わえ  
るのであ  
うこのさ  
さやかな  
快楽が、私  
がアートから逃れられない訳の一つでした。  
作品が変容させられていく快楽。ダイアローグは新しい訳を示唆することで、私をより逃れられなくしたのです。

それは野村さんの作品が、ある瞬間には血の鉄臭さに、ある瞬間には火の熱さに、ある瞬間には戦争の悲惨に、ある瞬間には色そのものに変容させられていく過程です。そしてまた、それは私じゃない誰かの発言のたびに、そのつど私にとつての作品が変容されていく過程です。それは私にとつての作品を、私じゃない誰かの発言の働きかけに委ねる気ままな過程です。そして同時に、そんな気ままな私の発言が、私じ

い誰かにとつての野村さんの作品に働きかけているかもしれない不思議な交流です。

一人で作品と向かいあうときに作品が変容していく快楽と、ダイアローグで感じた作品が変容されていく快楽との違いが私には言葉にできません。とくかく違います。壁あてと円になつてみんなでするキャッチボールくらい違います。マスターベーションとセックスくらい違います。私じゃない誰かの投げた球が私の位置に働きかけて、その働きかけられた位置から私が誰かの位置に働きかけること。ちよつと意地悪していきなり誰かがけて速い球を投げると相手がびっくりすること。その相手がおもいつき速い球を投げかえしてくること。その後、してやりたりって顔をする。田の中心にフライを投げたら誰かが落下点に二目散に撃け付けさる。壁あてでは経験できないことが、円になつてみんなでするキャッチボールすると経験できる。この違い。フェリチオされているときにクンニしようかなと思つこと。クンニしているときに69にもちこもつこと。相手が体がくわらせたのをきつかけに体位がかわること。マスターベーションでは経験できないことが、セックスでは経験できる。この違い。うまくはいえませんが、そんな愉しみをダイアローグの中で感じました。

それにも関わらず、ダイアローグの快楽がま

投を投げられたたいー(投げたいー)場違いなところを愛撫されたいー(愛撫したい)なんて思う。「オイラのびん吉」(根性ガエル)が人の胸には一匹くらいはいるものですね。

ダイアローグ中にいくつもあった。ついつい「オイラのびん吉」を静止できずに飛び出した発言も刺激的で素敵でした。少しおりこうさんすぎた自分の発言に反省しつつ、次のダイアローグは「オイラのびん吉」の勃起に身をまかせてもいいかとも思っています。そんなひろしに思いをはせつつ、感想をおわることじょうと思えます。

おさぎだいすけ (after 5 art 現代美術好き)  
 小学校の「ガンバリ水泳」(25メートル泳げない子供のために夏休み期間中に行われる授業で、権力の恐ろしさを身をもって味わったのをきっかけに、現代美術に迷いこむ。ほどなくしてサオイスキヤラリーに拾われ、after 5 artの運営に携わる。ソクラテスってただのアホなんちゃうんーって思っちゃうびりお茶目な二十二歳) 出陣(ちなみに、今母から関西学院大学の経済学研究科(マスター)に進学)。

作品について話すこと

江川久子

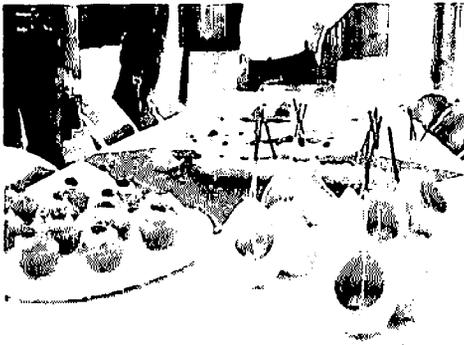
辻が「野村とおのの二人展」を思い立ってから、「紅をさす」展の企画・運営を私もほんの少しではありますがお手伝いさせていたたくことになりました。とはいえ、私は日本舞踊をやっているのだから、

美術や絵画について詳しくないわけです。今回、ギャラリートークについての感想を書かせていただくことになりましたが、もしかしたら美術や、「紅をさす」展の絵画作品からは離れてしまいかもしれません。スタッフとしてというよりはギャラリートークの参加者として「作品について話すこと」について思ったことを書いてみたいと思えます。

作品をみながら「作品について話すこと」は、その時その場所では現れてこないひとつの作品をたちあげていくことでもあるでしょう。しかし舞踊の場合、作品をみながら「作品について話すこと」は困難です。ダンサーは自分がいま踊っている作品を目の前にして「作品について話すこと」が出来きません。それは、舞踊は絵画作品とは違ってダンサー自身の身体を素材にして行うからです。観客も全身で舞踊をみている

わけですから、作品をみながら「作品について話すこと」は難しいでしょう。(もしかして出来ないことはないかもしれませんが試したことはないです)

舞台の後、一緒に観にいった友人や、踊っていたダンサーとその「作品について話すこと」は出采ますが、私は舞踊について話すこと自体難しいことだとも思っています。(このことはへ舞踊って何々という商題に関わっていますが)だから私は、作品をみながら「作品について話すこと」はとても貴重な体験だと思えます。しかも、今回のギャラリートークでは作品を前に作家一



人も参加しています。その上、知らない人とも一緒に作品をみながら「作品について話して」を体験できたのです。たまたま美術館やギャラリーに訪れて作品を目にしたとしても、そういう体験はあまり出来ないとあります。

私は、三年くらい前には芸術作品は人と關係を持つための道具だと思っていました。いまは作品自体が生命を持つこともあると思っていますが、そういう作品の生命のようなものを受け取ってから、その残像を言葉に変換するというのは思っている以上に大変な作業です。臨床哲学の薬原さんや高橋さんは、いろいろな人からその言葉を引き出すためにきつと苦労されたことだと思います。

臨哲さんの方法は、描き方や美術史からではなく、その作品の色や形やキズをみえたまま話すというものでした。それは、人がものをみることにいつも掛けているフィルターを垣間みることでもあると思います。そのフィルターが人それぞれ違うのは当たり前ですが、自分とは全く違うと認めることは、人が人と関わる時に避けられないことでしょうし、反対に、もしかしら共通することがあるのかもしれないと期待することには、誰でも求める思いがもしれませんでした。自分とは違ってもかまわないけど、同じかもしれないというアンビバレンスを寫藤が、今回のキャラクタートークのように公に晒される機会はないかながありません。そういう意味でも臨哲

さんの方法で行ったキャラクタートークには興味深いものがありました。欲を言えば、もっと破壊的なコメントが飛び交うことを許したほうが良かったのかなとも思いますが。

最後になりましたが、今回のキャラクタートークに関わったすべての人に感謝いたします。ありがとうございました。

えがわひさし

「紅をさす」野村喜代、おのさやか二人展「企圖運営担当」。

一九九七年より日本經濟學院花柳光雅に師事。

現在、教徒造型芸術大学大学院博士課程一周年。

二〇〇二年より芸術文科研究科において小林昌廣ゼミに入り日本舞踊研究を行う。

二〇〇四年より非常勤講師として三重県立名張高校にて「芸術各論」の授業を担当。

只今実験的舞踊公演の企画が進行中。企画運営／製作（実演）担当予定。

特集 2

岩下徹ダンスワーク  
ショップ  
+ 哲学カフェ  
= アート commons  
での試み

2003年、11/7-9に應典院で開催された commons フェスタ、「アート commons」。毎年秋に開催されるこのイベントに、舞踊家の岩下徹さんのダンスワークショップ「少しずつ自由になるために」(以下ダンスWSと略)と連動した哲学カフェを開いた。身体表現から言語表現へとつなげてみようというわけだ。身体運動という、あまりに直接的で自明な出来事の後にはまだ、なお、さらに、言葉で語る余地は残されているのだろうか？ 他ならぬその表現に集約させられたものを、言語に置き換える意味を、参加者はどう受け止めるのか？ そして、そのような場はいかにして成立するのか？

本報告ではまず、筆者がダンスWSと哲学カフェの様子を簡単に紹介する。次にこの企画を提案して下さった應典院ディレクターの川井田さんへのインタビューが続く。應典院は文字通りにはお寺だが、その活動は(加えてその建物も)いわゆる一般的なそれと全く違う。かつてお寺が担っていた地域における役割に真摯に向き合い、取り組もうとするのだ。そして恐らく、そのツールの一つとして、アートを見据えている。このインタビューでは、私たちの哲学カフェにかぎらず、様々な活動を可能とする、そしてアートを介したコミュニケーションの場を地域の中で提供しプロデュースしていく立場からのお話しを、commons を例にお聞きすることができた。思えば初めて哲学カフェを行ったのは2000年の commons である。幾度も関わりがありながら、誌上できちんと取り上げたことがなかったことが不思議なぐらいだ。應典院スタッフとして語りながらも、時には「個人的考えですが」と前置きしながら、シャープに、かつ冷静に、自分の視点を交えながら、お話し頂いた。最後は、ダンスWSと哲学カフェの様子を見学された古後さんによるレビューである。これまで哲学カフェを何度も行ってきたが、第三者的視点から見つめ直す機会があまりなかった。その意味で、我々にとってもはっとさせられるような気づきを得ることとなった。「ダンスと哲学する」という軽妙なタイトルに、参加者のからだと言葉の関係を示すエッセンスが見てとれるようで、個人的にとっても気に入っている。

## 報告 ダンスWS + 哲学カフェ

桑原英之

二時間のダンスWSの後、場所を移し、その参加者を主な対象とし、そこで起こったこと、経験したことをテーマにした、約二時間半のカフェである。進行役（岸田智、臨床哲学研究室）及び筆者もダンスWSに参加し、また逆

体の動きそのものを少しずつ確かめていく二時間だった。動かす、というよりも、体の動きをゆっくりと待つ。穏やかな説明、息づかい、摩擦音、開始の合図、その繰り返しの中を、静かに進む。だから逆に、体がきしむ内的反響が私にとって苦しかった。動かそうと思えばごく簡単な、当たり前前の動き一つ一つに、想像以上の力みがある。自然に流れるようで、その実、体に力をふるっていたのだと後から気付いた。そうして、自身に呆れ、驚きを覚えたことがある。最後の一分近い時間を、「立ち上がる」というただそれだけの動作にあてながら、私はついに立ち上がる事ができなかったのだ。

### B 哲学カフェ

a 今回、テーマが言葉によって提示されていない。再現可能な身体運動そのものを対象としたため、立ち返るべき地点を即座に明示できない。そしてまた、身体の動きとして明確に表されたことを言葉として表象し直す作業に、参加者がどのような反応を示すのかもわからない。

そういう不安があったが、参加者の意見は率直で、抵抗も薄かったようだ。何を感じ、考えたのか、更に他人の発言に触発され、別の経験にまで話しが及ぶ。その時、最初は岩下さんが準拠点

に、即ち、自分の経験を照らしあわせ、問い合わせる、参加者全員の共有する地平となっていたようだ。しかし休憩を挟み、後半、「表現」と「演出」の違いに論点が絞られた後、変化が生じる。

b テーマに対して特別な立場にある人がいる場合の哲学カフェがどのようなものか。ずっと気になっていたことだった。京都で行ったGTの場合でも、作家の位置づけは繰り返しの議論になった。つまり作品を対象とする場合、その作家の存在は作品に対する「答え」のように受け取られかねない。対話は自ずと参加者と作家の「問い-答え」にしばられる。できればそれは避けたかった。そして今回、前半は「岩下徹-参加者」という対話の図式があった。だが後半にその関係性がくずれていく。参加者の言葉の宛先が、他の参加者へと変化していった。素人に対するプロの舞踊家という役割から離れて語りかけられ、且つ、語りかけていく、そのダイナミズムがあったように思えるのだ。

c その理由はいまだはつきりと掴めていない。だが、冒頭に挙げた二点は今回、アーティストで交錯していたようだ。経験の言語化や再構築を促し、不在の身体運動をテーマにしながらも、皆が共有できる具体性にコミットし続ける

### A ダンスWS

運動の経験自体をテーマとしたこと。もう一つは、一般の参加者と立場が異なる参加者（岩下さん）のいる哲学カフェであったこと。ダンスWSの内容を私の感觸で紹介した後、上記二点に絞り簡単に報告したい。

歩く、しゃがむ、寝ころぶ、起きる、転がる、吸う、吐く、いわゆるダンスの、手前の手前の、



イラスト 山本麻紀子

ことができたのは、岩下徹を介して個々の身体経験に立ち返っていたからだろう。そして問いと答への形式は、一問一答の繰り返しのように聞いて、緩やかに共通の言葉のペースをつくりあげていった。その過程で、参加者の言葉の変化と平行し、岩下さん自身の言葉にゆさぶりをかけられていたように私には見えた。ただし、そのようなことが起こり得たのは、岩下徹さんの度量の大きさに依るところも大きかった。この、対話を通じた関係の変化のダイナミズムは「表現」と「表出」の差異という論点自体に大きく影響していたと思うのだが、報告としてはとりあえずここでとどめておこう。（くわばらひでゆき）

[interview]

アートの場合、場のアート  
川井田祥子さんに聞く

聞き手：桑原英之

i まず今年のコモンスの感想をお聞きしたいのです。

川井田（以下k）  
なんと言っても

今回は、二人のアーティスト（岩下徹（注一）さん、北山善夫さん／美術家）の力が大き

かったですね。コモンスというイベント全体を作り上げる上で、お二人の存在感が大きく影響していました。私個人の感想ですが、これまでにコモンスでお招きしたアーティストとは、また違ったタイプのアーティストでしたし、「参加者とアーティスト」というライン、あるいはその結びつきを特に強く作り出したのではないかと思っています。ただ存在感が大きかっただけに「他」と「他」の関係、つまりコモンスに参加した下さつた方同士の間接的交流は少し難しくなったのかなという印象も持っています。参加者同士の関係にも、意識的か無意識的かは分かりませんが、どこか、アーティストを経由してつながっていたような、そんな感じがするのです。例

えば今回、臨床哲学の哲学カフェには岩下さんも参加されていましたが、これまでの哲学カフェと少し雰囲気違って・・・

i 確かに少し違っていました。参加者の多くは岩下さんに向かって話していました。特に前半は。

k 参加者としてアーティストの話を聞きたいという気持ちはわかりますけどね。アーティストに直接自分の意見をぶつける機会なんて、なかなかありませんから。ただそうすると必然的に、アーティストとの一問一答的対話へとスライドしていきますね。コモンスフェスタというイベントでは、来られた方の主体的参加ということを意識していますし、ですから「観客」ではなく「参加者」とお呼びしているのですが、今回のコモンスがその理念に沿っていたのかどうか、まだ十分に整理できていないのも確かなんです。ただそれは最初の企画段階で考えておくべきことだったのかもしれないですね。それでも「アートコモンス」として、アーティストを介してのコミュニケーション回路を一応つくりだせたかなと思います。

あとこれは個人的希望なのですが、アーティストがコモンスの期間中に会場をあちこちウロ

ウロ口できたらよかつたかなと思います。例えば去年お招きした美術家の井上廣子さんは、期間中に何度かいらつしやって、作品を見に来られた方と話しをされることもありましたが、ただこればかりは現実問題として、お二人とも大変お忙しい方ですし、時間的に無理だったとは思いますが、それでも事前打ち合わせをして実現できたらかつたかななど、これは来年への抱負も込めてですね。

i 今年は「アートコモンズ」というタイトル通り、アートを全面に出しました。これまでもアートとの関係性は強かったと思いますが、今年は特にアートとして見せるということに力をおいていたのでしょうか。

k これも正直に言いますと、アーティストの人選がまず先にありました。これまで広報面だけっこう苦勞してきたからなんですが、お二人の名前を前面に打ち出すことで壁を越えようと考えたことも確かです。もちろんそれが全てじゃありませんが。

i コモンズの企画の進め方も例年とは違っていたように感じます。

k そうですね。これまでコモンズの大きな狙いの一つとして、参加団体同士の交流ということがありました。そのため、各参加団体のメンバーに実行委員になってもらって、コモンズ開催までに実行委員会を開き、交流を深めようとしてきました。それはわれわれ鑑賞院サイドの希望でもあったわけで、これまで実際に、活動内容や方向性が全く違う団体が出会える場としてはうまく機能してきたのではないかと思います。本当はそこからさらに進んで、団体同士のコラボレートによる企画が生まれればいいな、と。でも去年あたりから、「そもそもそういうことを各参加団体の人達が望んでいるのか？」と考え直すようになって。普段は別のお仕事をされるながら活動している方が多いですし、自分たちの企画だけで手一杯な面があることも分かってきましたから。だから団体同士が直接つながることは現実的にむずかしいかもしれない、ならどうすればいいかということでも試行錯誤したのが、今年のコモンズです。例えば哲学カフェの場合、岩下さんのダンスWSと運動した形でお話しした理由の一つに、そういうこともありましたが、団体同士が難しいなら、事務局が間に入ってつながってみる。また「アートコモンズ」ですから、アーティスト同士のつながりということも重視する。今回、後者は特にうまくいったのではないかと

思っています(注二)。

i アートコモンズという企画は最初に誰が考えたのですか？

k 秋田です(注三)。毎年年末に反省会をして、来年どんなことをしたいのか考え始め、春頃にはスタッフが全員集まって会議をするのですが、今年の会議の際、ふとこれが閃いたそうなんです。それでゴロもいっし、これでいこうと(笑)。

i その今年のコモンズの中で川井田さんの役割はなんだったのでしょうか。

k ここからここまでというふうに明確には決まっていません。ただ今年に関してはやはり岩下さんと連絡役ですね。「岩下さん付き」と言っただけでいいぐらい(笑)。逆に言うとそこにエネルギーを注ぐ分、他のスタッフの仕事に対してあえて少し距離をおいていた面もあります。それぞれがそれぞれの責任で仕事をこなせるようにというか。例えば北山さんの美術の展覧は大塚が担当し、大学の公開ゼミは池野、ドラマカフェ(注四)は柳沢、そしてその人の責任で企画を具体化していく、といった具合にです。それは

それでよかったのですが、各担当の仕事内容も共有やスタッフ同士の連携に関しては反省点もあつた気が・・・。

i それはうちの研究室でも同じですよ(笑)。

k (笑)。そうですね。どこまで自分の判断を進めてどこから共有するかという線引きが難しいですよ。

i 川井田さんが担当された岩下さんとは、事前に何度も打ち合わせをされたのでしょうか。

k 岩下さんをお願いすることになった最初のきっかけは、志賀さん(注五)とお会いしたことなんです。二〇〇二年秋に行われたNPO法人DANCE BOXの発足記念パーティーで直接お話しする機会があり、その時、いつか應典院で岩下さんの公演をしたいですねという話を温めながら、それだったら次のコマンスでやれたらいいなと思って、他の應典院スタッフにはかり了承を得ました。そして志賀さんとスケジュール調整をはじめ、やることは決まったのですが、岩下さん本人は直前まで山海塾の海外公演があり日本にはほとんどいらっしやらな

かった。だから具体的なことを岩下さんと直接話し始めたのは九月末ぐらいからですね。その間は志賀さんとやりとりを続けていました。それで岩下さんが日本に戻られてお二人そろって應典院に下見にいらっしやつたのですが、そして今度は志賀さんがコマンス当日には来られないことが分かったんです。志賀さんが関わってらっしやる別の企画と日程が重なってしまつて。

i 確かに当日、志賀さんがいらっしやらなかつたので、なんでだろうと思つてました・・・。

k 実はダンス公演を主催するのはほとんど初めてでしたから、その意味でも少し慌てました。いや本当に「ええー?」って感じでした。二年前のコマンスでも清水啓司さんの「ダンス参観日」という企画はやつたことがありますが、プロデュースした方に当日の進行をお願いしてたんです。今回は細かなこと一つひとつを岩下さんにお聞きしながら進めていた状況で・・・いやならないことも多々あつたと思いますが、岩下さんはすべてを受け入れて下さいました。どんな状況でも自分の最善を尽くすという姿勢を目の当たりにし、とても学ぶことが多かつたです。

i 應典院の中だけでなく、墓地で踊るというパフォーマンスがありましたしね。このアイデア(注六)は應典院サイドから提案したのでしようか。

k いえ、岩下さんからの提案ですね。話しが前後しますが、岩下さんと北山さんの参加が決まつた後、お二人にコラボレーションをもちかけました六月末ぐらいですかね。お二人は互いに面識がありませんでしたし、志賀さんや展覧会をプロデュースした樋口さんも交えてとりあえず一度会つて話しをしようということになつたんです。そして京都でお会いし、應典院についても写真や資料をお見せしながら説明していただいたのですが、その中の應典院に隣接する墓地の写真を岩下さんが見て、ここで踊つてみたいとおつしやられた。それが最初のきっかけですね。

i でもよく決断したというか、許可がおりましたね。お墓の所有者を含め理解を得るのは大変ではなかつたですか？

k 場所が場所だけにその場ですぐお返事もできませんでしたので、とりあえず話を持ち帰り秋田に伝えました。秋田は前向きに捉えてくれたんですが、やっぱり大蓮寺の住職ですから、

守ってもらいたいことも当然ある。だからそれを守っていたらばという条件で、OKが出ました。檀家さんにはお彼岸の集いなどの際に、秋田から事前に説明し、理解と協力を求めました。岩下さんにも守ってほしいこと、例えばここだけは触れないで、というようなことをお願いして実現できました。

i それでも普通のお寺ではできないですよ。最初に思ったのは、應典院という場所の意味や、秋田さんがコモンズなどを通してやろうとしている事が少しずつ地域に浸透してきたからこゝでできたんじゃないかと思うのですが。

k どうなんでしょう。ただ、地域密着と言えるほどに應典院の活動が地域社会にとけこんでいるかという点、必ずしもまだ十分ではないかもしれませぬ。あ、スタッフとしてこれは問題発言かな(笑)。でも地域に根付くとき、二通り考え方があって思うんですね。一つは内側から直接に地域とつながっていくやり方。もう一つは外側から理めていくやり方。そして今のところ、私たちは後者の方法で進めていると個人的には捉えています。つまり應典院という場所の存在や活動の意味が、地域より先にまずどこか別の場所や人によって認識されたり評価されたりし

て、そしてその評判が徐々に地元地域にも伝わっていくというか。「ああ、自分たちの地域にこんな場所があったんだ」という具合に、第三者や口コミを通じて改めて再発見するという、そういう方法ですね。その意味では今は外の方で浸透しつつあるのかもしれない。だから、徐々に、少しずつ、ですね。

i 大学もその点は同じ気がしますね。地域とのつながりといっても、近隣の住民が敷地内を犬の散歩に来る程度ですから。それに関連して「方法としてのアート」についてお聞きしたい。というのは應典院では講演はもちろん、NPOなどのグループ活動のために場所を提供することもあります。その中でもとりわけ應典院はアートに力を入れているように見えますがなぜでしょうか。

k アートへの注目、きつと秋田の頭の中にはずっと前からあったのでしようが、実際にアクションを起こし始めたのは比較的最近なんです。最初のコモンズは、福祉系のワークショップなどが中心でした。たまたま私がスタッフになった二〇〇〇年くらいからですかね。その頃、樋口さんがアーティスト仲間と「アートパッキング」というプロジェクトを進めていました。文

字通り建物全体をアートでつつんでしまおうという企画で、應典院でやりたいという希望があり、それならばということ、コモンズでその企画をやった。それがアートと深く関わりができた最初です。

i シアトリカル應典院(注七)としての活動もその頃ですか。

k それは應典院が再建された一九九七年からですね。秋田とも古い付き合いのある應典院寺町倶楽部運営委員の西島さんという方がいて、その方ともこの場所をどう活かしていくかをいろいろ考えたそうです。その相談の結果、ここが劇場であるということ、打ち出していく方向性、「シアトリカル應典院」としての方向性が決まりました。

i では演劇への関わりはすこく早かったんですね。

k ええ。もちろんそれ以外の可能性もいろいろ考えてはみたようですけど。九七年の四月に再建されて五月にオープンイベントをやったときに、どういう人達に使ってもらおうの、いかということ、どう人達に使ってもらおうの、

してその中からどれがいいだろうということである。いろいろな意見を聞いた結果、一番反応が良かったのが演劇だったという。

i ただ演劇との関わりは早かったけど、特にアートということが意識され始めたのはやはり二〇〇〇年のコモンスズですか？

k そうですね。実は最初、アートバツキングの企画を開かされたとき、私は「アートねえ。」という感じだったんですよ（笑）。いや、ほんと、正直そうだった。それまで私自身はアートと縁遠くて、あまり知りませんでしたから。秋田がなぜアートに注目するのか、半年ぐらいいはよくわからなくて。

#### チエメの哲学臨床

i それでもアートに注目していくようになって。続ける中で、アートを介して関わるといったことに対する意識が変わった？

k 私個人に話しを限定すれば、後から振り返ってみて分かったという気がします。二〇〇〇年のコモンスズをやっている最中も、十分にはみえていなかった。そのへんのことには、でも終わった後でいろいろ考えるようになったんです。例えば会報紙「サリユ」の座談会でいろんな人の

話しをきいたり、自分で調べたりして、もう一度自分でアートを捉え直すようになった。そこで見えてきたのは、アートが狭義の美術に限定されるわけではなくて、「多様な価値観を認め合うツール」になるんだ、ということですね。それが大きい。だからその意味で、いまは、コモンスズが現代アートに関わってきたことにはすごい意味があると思っています。というのも、まさに私たちの常識や日常的価値観にゆさぶりをかけてきますから。

i 同時にだからこそ一番難しい。

k そうですね。簡単には理解されないし、受け入れられにくい。

i それでも川井田さんのなかでは何か確信がある？

k 私はもともとNPOやボランティアの分野に長く関わってきましたが、そこである限界を感じたようになってきました。例えば講演などを企画した場合、講演内容に興味のある人しか来ないですよ。そうすると、一生懸命やればやるほど、どんどんたこぼ化してしまう。いろんな人に関係するテーマだったとしても、一番来て

ほしい人に来てもらえないというジレンマをずっと感じていたんです。そのジレンマについては今も無くなったわけではないんですが、それに対する一つの方法というか道筋として、アートがあるのかなあとということに気付くようになりまして。アートって何の気なしにやってきたり触れたりするものじゃないですか、特別理由がなくても。そして知らない間にそのアートを紹介して問題意識に目覚めたり、或いは作品を見た他の人と一瞬にして何かを共有していたりすることもあります。その間口の広さですかね。確かにある一つの問題意識やテーマについて鮮明に問いかけたり、立場を問うたりすることはないかもしれませんが、そのことがかえって関わりの幅を広げるような、そんな気がしています。

i 確かに人を迎え入れる柔軟性のようなものがアートにはありますね。私もコモンスズに関わるまではあまりアートのことは知りませんでした。例えば私の場合、去年のコモンスズで井上廣子さんの作品や本人と出会えたというのは本当に大きかった。その意味で、アートを介してきっかけをもらった一人かもしれません。

k ありがとうございます。確かにコモンスズで

やっていることに關してある種の確信というか手応えはあります。でもそれもまた主観的レベルでそう感じるという、そういう段階ですね。これは評価の問題にも関わってきますし難しいのですが、全体として、あるいは客観的にみてどう

評価するのかという、その全体像を、私自身まだ掴みきれない面もあります。例えば今年のコモンズでいうと、アーティストトークの時に観客席から発言された年配の女性がいらつしやいましたよね。たまたま新聞で岩下さんの公演が行われることを前日に知って、翌日午後の幕地のパフォーマンスを見に来て、続けて夜の部の公演とアーティストトークにも息遣参加されました。そしてとても感動したとか、いろいろ発言して下さった。ああいう一言には救われまじし、手応えというのもそういうところからですかね、感じるのとは同時に、そういうことの積み重ねの中で見えてこないのではないかなという気もして居るんです。勿論、それだけではまずいのでしようが、ただやはり素朴に、例えば公演の後、本堂ホールから出てきた人の顔が満足そうだとか(笑)、そういうこともやはり大切だし、力になる。

i 評価の問題は難しいですね。芸術に限らず、人文系一般に言えることですが、少し話題を変

えます。コモンズではインターン制度を通じて学生がスタッフとして関わっていますよね。彼、彼女たちはコモンズの中でどういう役割で動いているのでしょうか。

k 正直に言えば、インターンを受け入れつつも、彼彼女らに力を注いで育てるほどの余裕はあまりないんです。八月から来てもらうのですが、その時期だと広報の段階になってしまふ。経費を積むには、本当は企画の段階から入れるのが一番いいのだとは思いますが。だから毎年なんとかしたいなあとは思いつつも、なかなか手が回らないですね。勿論、学生たちはよくやってくれたと思ってますが、せめてコモンズや日常の仕事を通じて新しい人に出会い、何か掴んでもらえればいいかと。半分聞き直ってますが(笑)。また今年はコモンズが終わった後に、参加団体の人へのインタビュを担当してもらったので、そっちの方で得るものがあつたかもしれせん。

i すこいしつかりしました(注八)。少なくとも私のインタビュに比べたらはるかに。

k (笑)。でも本当に余裕がないです。そうやってせいぜい機会をつくることぐらいしか。だからあとは自力で掴んでくれという。

i 先ほどもでた「シアトリカル應典院」の事についてもう少しお聞きしたいと思います。演劇もアートですが、その見せ方というのか、演劇への関わり方もここは少し変わっています。今年には特に、若手の劇団を育てるための仕組みを積極的に打ち出しています。

k 演劇祭(注九)のことですね。実は再建当時からだいたい年一回ぐらいはやっていましたよ。ただ昨年からは、このままではちょっとまずいだろうということで、内容を見直して企画を立て直そうとしました。そのための話し合いをしていたのが二〇〇二年の二月か三月のことで、くしくもちょうど扇町ミュージアムスクエアや近鉄劇場の閉鎖のニュースが相次いだ時期だったんです。そういう時流もあつて、百人ぐらいの収容人数の應典院という場で何ができるのだろうと、話し合いを重ねて考えた。例えば自分たちが劇団を育てるとするのはどうか。でもそれはおこがましいだろう。演劇を普段からよくみてるわけでもないし、ましてや内容を評価する力があるわけでもないし、今更それを磨こうというのもちょっと違う。そこで一つはつきり見えてきた方向性が、演劇と社会をつなぐという、その接点としての役割を担っていくということ

だったんです。そして制作者の育成に力をいれよう。

i その場合の制作者というのは？

k 定義をはっきりさせているわけではありませんが、まずはマネジメントですね。どこに広報をかけて、どこにチケットを買ってもらうかという。あと助成金の申請をしたり、スタッフを束ねて段取りをつけたり。お金のやりくりを含めて仕事の範囲は広い。でもそれだけではなくて、もっとも必要なのはプロデュース能力ですね。さつきも言いましたが、社会と演劇をつなぐ接点をつくりだすこと。それが夢というか、希望ですね。演劇祭をリニューアルした去年は一般公募で劇団を募集しました。旗揚げ五年以内の若手劇団で制作会議に出席できることが条件です。本当は専任の制作者がいる劇団が望ましいのですが、今のところ制作者と代表と作家を兼ねてきた劇団がほとんどなので、制作担当としてメンバーが会議に出られることを条件にしています。応募してくれた二六劇団から七劇団を選び、ほぼ一年間かけて、一二月に一回のペースで会議を行い、互いに情報交換しながら積み上げていったのが今年の演劇祭です。私たちは作品を見て劇団を選んだわけではないし、作品

の内容をあれこれ評価するわけでもない。その点、他の演劇祭と比べてかなり異質でしょうね。

i 一年間通して変化はあったのでしょうか。

k 最初、七つの劇団の間に横のつながりはありませんかったようです。またお互いになんか広報活動をしているのかというところも知らなかったみたいで、自分たちで芝居を打つのに一杯という感じでした。でも、会議を通じて、例えば助成金の申請先だとか、少しずつお互いの情報を共有していったし、あと企画書の書き方ですね。劇団によって書き方も違ってましたから、その辺もお互いを参考にしつつ進めていった。五月には應典院の本堂ホールで記者発表がありました。さつきも話しましたが、劇場閉鎖が相次いでいたこともあって多くのマスコミ関係者が来てくれました。

i その劇団のメンバーが今回のコモンズ期間中に、ロビーでカフェを開いてました。

k これは私が言い出しっぱなしなんです。劇団が演劇の世界のなかだけで閉じてしまっていたはずいのではないかと思ってましたから。なんか体そうですけど。それに会議を通じて他の劇団

のメンバー同士も親しくなってきましたし、コモンズにも興味をもってくれるかなと思って「カフェやらへん？」と気軽に声をかけたんです。そしたら話しに乗ってくれて。当日は演劇について深く話るとか、そこまではいかなかったかもしれないんですが、普段あまり演劇になじみのない人や年配の方がふらっと立ち寄って、演劇人として話をするという場は作れたかなと思いますね。ただこれも思った以上に準備や仕込みが大変でしたから、劇団の人はえらいこと引き受けちゃったと思ったかもしれないですね(笑)。

i アートについて語る場所はどこにあるんだろうと、時々思います。だから今回のドラマカフェという、劇団の人がカフェを開き、演劇について気兼ねなく語る場所を作ろうとしたことの意味って、結構大きいように思えるのですが。今後こういう場をつくりたいと思ってるっしょいますか。

k それは思いますね。まだ十分に手が回らないですけど、今後もそういう場を多くつくられたらという希望はありますね。さつきの演劇祭でも各劇団に、三回公演があったらそのうち一回は必ずアフタートークの時間をつくってもらいましたし。いずれにせよ、何か仕掛けも必要なの

かもしれませんね。時間と場所の問題ももちろんですが。

(注)

i なぜアートなのかということの理由の一つに、関わりやすさということをおっしゃってました。そして確かにそれはあるんだけど、じゃあ関わった後にどういう展開の可能性があるのかということにはまだ難しい面が残っていると。

Métier of the Clinical Philosophy  
k 入り口の関わりやすさがある反面、その出口というか、どうその後の展開につなげるかというアウトプットの問題はまだまだこれからの課題でしょうね。それこそ本当に、作品を展示するのと同じくらいのエネルギーが必要だと思えます。ただ繰り返しになりますが、そこはやはり工夫の仕方があるんだと思います。その時はまた臨哲さんとも協力して何かやれたらいいですね。

i ありがとうございます。精進します(笑)。

一 即興ダンスを中心とする舞踊家、ダンスセラピートの活動も行っている。

二 死に記事を扱った北山さんの作品を二階ロビーの壁二面に張り出し、それらの作品越しに墓地での岩下さんの即興ダンスを見るという企画と、本堂ホールに展示された北山さんの大型作品の前での即興ダンスというコラボレーションがあった。その後、展覧会をプロデュースした樋口よう子さんとともに、アーティストトークが行われた。

三 應興院主幹ノ大蓮寺住職、コモンズフュスタを含め應興院の活動の中心を担ってきた。それ以外にも、その枠におさまらない経歴がある。一度應興院HPにあるプロフィールをご覧下さい。

四 コモンズの期間中、二階ロビースペースにてアートの劇団員がカフェを運営していた。劇団についてはインタビュー後半でもでてくるのでそちらを参照。

五 志賀玲子さん。(右)シエーツアンドルーツ代表。

京都造形芸術大学舞台芸術研究センターやアイホールなどのプロデューサーを務め、コンテンツポラリーゲンスの企画を多数手がけている。

六 應興院に隣接する墓地で行われた岩下さんの即興ダンスのこと。

七 この後の話しに出てくるように、應興院では演劇祭はもちろん、劇場としてもよく知られた場所であ

る。シアトリカル應興院とはその場合に使われる名称。

八 ちなみに臨哲にインタビューに来たのは唐沢なみさん(立命館大学)。

九 二〇〇三年は「SPACE x DRAMA 二〇〇三」にて七劇団(千年枕、劇団鹿殺し、しかばんび、ミチのミチ、x x x、劇団アクスビ、特攻隊台本ミ団、満月動物園)が公演を行っている。

かわいだしように

二〇〇四年三月までは應興院ディレクターを務めていたが、この四月からは、開運の出版会社で編集の仕事に携わっている。

“look”や“watch”よりも“listen”という言葉をよく用いるダンスの講師は少なくない。音楽や講師の言葉に？いや、体に耳をすませというのだ。でも、耳をすまして何が聞こえてくるというのが。わかるようでわからぬまま、いつしかワークショップのつまみ食いもやめてしまったわたしは、このほどとある哲学カフェでこの問いを思い出した。

哲学カフェとは、「哲学する」、すなわちわたしたちの生にとって差し迫った問題について考える営みを、ひとびとがともにする場だ。専門家がそうでないかは関係ない。そんな試みのひとつが、今月の初め、ダンスのワークショップと協力して行われた。まちづくりやアートに関する教育・市民団体、NPOが集う「コモンズフェスタ2003」という催し（應典院寺町倶楽部が主催）で。ワークショップの講師は、完全即興でダンスの成立する瞬間を問い続けるかたわら、「少しずつ自由になるために」というテーマでワークショップを行ってきた若下徹。カフェを出すのは、今回がコモンズフェスタ4度目の阪大の臨床哲学研究室のひとびとだ。お題は、「身体からわき出る言葉に耳をすませ」。さて、参加者の身体からは一体どのような言葉がでてきたのだろうか。

ワークショップ参加者ほぼ全員に若干の見学者が加わって、30名ほどでいっぱいになった應典院の一室。進行役は、哲学カフェについて軽く説明した後、まずは自らワークショップの感想を述べ、参加者にも促した。「意識するより前に動いていることがあった。」「こんなに人の集ってる場所で眠ってしまうなんて、ショック。」今し方身体に起こったことが、驚きとともに語られていく。「ダンスを習うと硬いと言われることが多いんだけど……。」こういった違和感めいた感想から、実際に感じられることと相容れない様々なもの（日頃抱いているダンスや自分についてのイメージなど）が意識されてゆく。じつはこれらは、共有される問いを見つけるための出発点にすぎない。しかし、わたしにとって新鮮だったのは、たった2時間のワークショップが身体をかくも揺さぶったこと、そして身体がじつに様々なものを受け容れていることだ。そこで言葉にされたものの幾ばくかは、身体の声、それもふだんは聴かれない声といってもいいかもしれない。このように身体に潜む声は、まさに耳をすませる場に応えて出てきたように思われた。

まずワークショップ。そこで行われたことは「体に耳をすませ」の一語にとどめるにはあまりある。が、特に記したいのは、音楽が用いられず、講師が非常に切りつめられた言葉で「少しずつゆっくり」、「丁寧に」動作を行うよう促していた点。動くことで生まれる感覚が、「正しい」や「美しい」や「～のため」にすりかわらぬようにとの配慮だろうか。そして哲学カフェにおいては、はじめに進行役が、誰のどのようなことばにも耳を傾けるよう呼びかけていた。この唯一のルールは、まずは聴かれる価値がないと思われ、聴かれてこなかった声に存在の場を与える。語りあう前に、聴きあったことで露わになった声。現代において、人々のダンスに対する要望の少なからずは、このような声を聴くことにあるのかも知れない。

\*本文は「C/P」vol.27に掲載したものに加筆・修正を加えたものである。

### ごなおこ

大阪大学文学研究科修士。非常勤講師。19世紀末から20世紀初頭にかけての舞踊史、舞踊理論を研究しています。

# ダンスと哲学する

哲学カフェでからだに耳をすませ

古後奈緒子

## 特集3 神戸アートアニュアル からひろがった活動

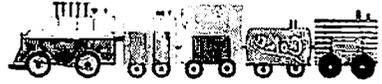


イラスト 山本麻紀子

神戸アートビレツションセンター(通称KAVC)では、一九九六年から「神戸アートアニュアル」という展覧会を毎年秋に行っている。ここでは出展対象を関西在住の二十七歳未満あるいは学生にし、作り、出品作家たちの主体性を重視した独自のプログラムを実施することで、彼らの自己プロデュース能力のトレーニングを図っている。さざり二〇〇二年からは展覧会の企画と実行におけるインターシッパ制度を開始して、鷲ぎ手の育成にも取り組んでおり、アートマネージメントを実践的に学ぶことのできる貴重な場を提供している。

以下の記事は、「この展覧会にインターンとして参加した半年間の報告と、そこで出会った出品作家の山本麻紀子さんによる寄稿。そして彼女の福井高校と洛星高校での授業の記録である。山本さ

んのアートは「毎日の生活の中でちょっと立ち止まり、いつもと違った視点で物事を捉えなおしてみる」ということがきっかけになっているが、それは哲学の始まりとも重なる所があるように思われて、授業を依頼してみようということになった。また、彼女はコミュニケーションをテーマにした作品を数多く制作しており、その点でも大いに示唆を与えてくれることと思う。

### 神戸アートアニュアル2003 に参加して

高嶋麻衣子

二〇〇三年の六月から約半年間、神戸アートビレツションセンターが主催する「神戸アートアニュアル2003 Grip the Gap」という展覧会に、私はインターンスタッフとして参加した。アーティストと観客のつなぎ手という役割ではあったが、そもそもその役割自体がなじみのないものであり、ましてや初めて顔を合わせた9人のスタッフと歩調を合わせての共同作業というところで、当初はかなり戸惑いがあった。

このインターン制度は、関西の若手アーティストのための展覧会として今年で9年目を迎える「アートアニュアル」という企画の中で、アートマネージメントを学ぶための機会として一昨年から実施されており、展覧会の企画のほとんどに関わることができる。そのため同じインターンとして参加しているのは多くが芸術大学の学生、あるいは将来アートに関わる仕事がしたいと考えているメンバーで、その中で哲学専攻の自分が何をできるのかということにはつねに考えさせられた。しかもメンバーの中には自分で何度も展覧会を企画している人もいるので、そういう経験がゼロに等しい自分には目立つアピールポイントがなく、初めは何となく無理やりでも自分の知識を役立てることはできないかと考えていた。しかし、そう考えれば考えるほど何事もうまくいかず、結局この方法はあきらめることにした。ところが、あきらめざるを得なかった…。そして辿り着いたのは、「開き直る」という方法だった。つまり、自分には実践的な知識や経験として役立てるものは何もないと開き直って、インターンに応募したのはじめの動機だけ持ち続けるという方法である。私は単に以前から美術に興味があつて展覧会に行くことも大好きだった。だから一つの展覧会ができるまでを横で見ただけではなく、何らかの仕方に関与できるというこの機会に内部に入ってみたい。そういう単純なことが今回インターンに参加した動機だった。

そしてとにかく私はこの動機を忘れずにインターンに取り組みせようと思ひ直したのである。そうして色々な活動に参加しているうちに、一つ興味深い出来事があった。それは、インターン

企画を主催者の方に持っていた時の出来事だった。インターンは全体での会議の他に、インターンだけのミーティングをもって自分たちの企画として何がしたいかということをお話合っていて、そこでは広報活動の充実ということも様々な形の案として出てきていた。始めに出ていた案の中には、より多くの人にアートマニュアルという展覧会を知ってほしいということと、幅広い対象を見据えたものもあった。だが、その案を主催者側との会議に持っていた時、主催者の方から自分たちのいる場所をもって見直し、この指摘が、私にとってはまさに「目からうろこ」の指摘だった。というのは、その視点は臨床哲学で現場とは何かということの議論になった時、現場は学校や病院といった特別な外だけにあるのではなく、自分のいるまさにその場所が現場になる、という考え方が重なるものであったから。それにこの時の私はとにかく今自分がいるこの場に集中しようと思っただけで、もう臨床哲学がどうということを考えるのはほとんどやめにしてた。だから少し前の自分が欲していたようなものがあきらめた途端にやってくるという事態そのものも、本当に驚くべきことだったのである。主催者の方が指摘した「自分たちのいる場所」とは、「学校」に「一番近い立場である」といった自分についての基本的な情報が埋められている場所のことであり、それは、自分

とってはごく当たり前のもの、展覧会の仕事ということとかけ離れた、大して役に立たないものとして見過ごしていた自分の情報だった。しかし考えてみれば大学という場所は、主催者側はせいぜいポスターやチラシを送るだけで、その中でそれが十分な効果を発するように置くことや、作家たちと同世代の人達に直接訴えかける機会というものは持っていない。つまり自分にとって見落とすほどの身近な所に、自分の力を活かすことができる重要な要素が隠れていたのだ。そのような経緯から、今回のインターンの広報活動は学校での宣伝を含めた草の根的なものにしようということになった。そしてこの経験は、自分にはどんな働きができるのかということを考える時、まずするべきは自分の持つ



ているものや自分が今いる場所を客観化してみることに、ということ、そういう当たり前のことを「実感」として感じることで、私にとって大きな意味を持つものとなっ

た。SDや哲学カフェをやりたい、哲学的な意見がほしい、ということでは私はこの展覧会に招かれたわけではなかった。自分の興味一つで飛び込んだってしまっただけである。しかし特別な立場を与えられず、十人のスタッフの一人としての働きを求められたということに意味があるのだと思う。私は哲学をする者としてはこの場所に何も成果をあげられなかったらう。だが、少なくとも形の面で、アートをしている人も、哲学をしている人も、同じ土壌に立って同じものを作るといふことくらいは、この展覧会に残せたのではないかと思う。作家やインターンの中にはなぜ哲学科の学生がアートマネージャーを学びに来ているのかと思う人もいたかもしれない。私も特に哲学科の学生として何かを残せたとは決して思っていない。だがこの展覧会が純アート化するのに対して、一つの手助け(邪魔?)はできたかもしれないと思っっている。作家の人やインターンに「要な感じ」を持ってもらえたらそれでいいと思うのだ。とはいっても、振り返ってみて大切だったのは、私のいる場に集中すること、それだけだった。だから「そこ」で欲を出して「要な感じ」が「いいかんじ」になるのを目指したい、というふうなことは言わない方がいいはずだ。(たかしまよい)

## アートとコミュニケーション

山本 麻紀子

人と初めて会う。その時は、その人の小さなしぐさのかけらや言葉の端々にその人を読み取ろうとします。それは、自分とのキヤップだったり今までの経験と照らし合わせるが、いかにそのキヤップをたぐさん発見して自分の心を驚かすことができると、つまりそれをとてもしんじること、新しい感情、新しい何かを見つけた時の気持ちよさ、そこに快感を感じるのです。そして、もっと知りたい、もっと知って欲しいという流れに繋がって行くのです。教えてもらったら、教えてあげる。これは自己紹介の法則。そして、それらの情報は、次にあう時に、また次に新しく出会うあなたのために、私の心にストックされていくのです。

私は、京都市立芸術大学に入学してからいつもコミュニケーションをテーマに制作を続けています。そもそも、私の生まれた家庭環境には芸術や美術とかわれるものは全く見当たらないものでした。友達で何か少しでも秀でた才能のあ

る人にとては憧れ、絵がうまい人と出会えばうらやましいなと思い、そして自分の無能さにいつもがっかりしていました。そんな私だったので、ひょんなことになぜか自分で表現するという美術大学を目指すことになったのです。ここ最近までその急転換の原因が全く分からなかったのですが、この年になって順々と自分の歴史をひも解いて行ってようやくこれかなという結論に辿り着きました。

私は、中学生の頃から何故か友達からいろいろな悩みを相談される存在でした。恋の悩み、進路の悩み、人間関係の悩み、家庭の悩み。そのたびに私は、全力投球して少しでも気が晴れるように少しでも前向きになれるようにいろいろなことを一緒に悩んで考えて、少しでも重荷を取り除こうと試行錯誤していました。でも結局、その悩みは当人だけにしか本当に理解できることはなく、そしてそれを克服したり解決に導くことができるのも、それもやはり当人だけかなというところはどうしてもぬぐいきれないところだと感じていました。

しかし、そうであったとしても、その人が私に悩みをうちあけてくれたという事実で感謝し嬉しく思い、最大限のおかえしをしたいと心から強く思っていました。そしてその時に、私なりにできることを必死に考えました。みんなに手作りの「おまもり」をあげよう、その人のこ

とをいっばい思っ、その悩みが消えることも祈りつつ一生懸命作って、1人1人にあげていたのです。いろいろな思いのこもったおまもりに手紙を添えてこっそり手渡していたのです。それをもらったみんなは、私の念力が通じたのか、必ず元気になり前向きになり晴れ晴れとした笑顔になって感謝の言葉をくれたのです。その時に、自分の心をこめまわって作ったもの、それが人の心を動かして、すっとまとわりついてきた辛さからの突破口を開くお手伝いできたこと、とてもとても幸福を感じたのです。「ありがとう」と言われるたびに、本当に強く喜びを感じていました。その度に、きっと、「あ、何もできない私でも自分の作ったもので、人の心を動かすことが出来た」と思ったのでしよう。言葉でなくとも、自分の手で作り出すものによって、人とコミュニケーションをとることができた、そのことが私のもので目覚めた原点なんだと最近気づいたので

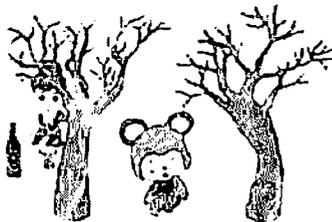


イラスト 山本麻紀子

す。



福井高校で授業をする山本さん(左)と授業をコーディネートした高嶋(右)

つまり何が言いたいかと言うと、人間は生まれたからには必ず1人1人違うのです。見た目も性格も価値観も感覚も、絶対同じ人間なんていない。それこそが一番素晴らしいことであり一番面白い点なのだと思えます。だから、知りたいたし接したいし知らないうちに会ってみたい。そんな自然な好奇心が、私を動かしています。そういう勢いのある好奇心は、高い洞察力と長い持久力を備えているのです。そんな好奇心が、1人1人に大切に向けられる。そして、そこからコミュニケーションへと発展していくのです。

1人1人を、まるごと存在として受け止める。

存在として把握するのです。つまりは、ど〜んと構える。おおらかになるのです。それって、実はほんとに難しい。でも、おおらかにになったら生きて行く視野が一気に広がりました。

そのころに気づかされることになったきつかけがカナダへの留学でした。英語もろくに話せない状態のまま、準備も特にせず、適当な生活必需品と英和辞書だけを持つての留学でした。そんな状態であったからこそ、生活していくためにも美術大学の中で自分を表現していくなかでも、人とのコミュニケーションをなんとかしてでもとらざるをえなくなり、でも、言葉は通じないし生活環境も違う。そんな状況で私に何が出来るか。いきつまった時にでてきた答えは、言葉が通じなくても共有できる何かは世界共通に必ずあると信じて、とにかく作品を作りまくって、それをツールに人とコミュニケーションの冒険をするしかないということでした。その結果、死にもくるといゆえにうまれてきた作品たちは、私をおおいに助けてくれました。せっぱつまれば何でもできる。怖いものなんて決してない。いつも新鮮な気持ちで物事を捉える。今思えばおこすと、この経験をふんだからこそおおらかになれたんだと感じています。

自分の知らない世界にいきなり飛び込んで行くこと。実際に飛び込まなくてもちよっとだけ

いつもと視点をずらしてみたり。たちどまって景色を逆さに見てみたり。そんなささいな行為がや細工によって見え隠れする一瞬に、面白いコミュニケーションの切り口が潜んでいるのです。そこに気づけば、自然に表現というものに結びつくと思えます。そうやって毎日を色付けて鮮やかにしていくものこそが、アートの役割だと信じてこれからも新しいコミュニケーションの冒険を続けて行きたいと思っています。

#### やまもとまきこ

1979.12.28生まれ、現在京都市立芸術大学大学院 構想設計専攻二年在籍。コミュニケーションを作品づくりのテーマにし、展覧会、講演会、ワークショップ、展覧会キュレーション、など幅広い分野で活躍中。今後の活動予定は、9/10-9/26にカメラのナニワ心齋橋本店全部でビッグプロジェクト、10/11秋の関西大運動会プロデュース、9月 新聞地アートストリートプロジェクト 新聞地マップ制作編集(9月完成予定)があり、12月にはベルリンで展覧会を予定している。

2003年1月19日(土) 滝井高校「出会いの哲学」  
講師 山本麻紀子

〈授業の流れ〉

1. 自己紹介：ビデオ作品の紹介

- ・100人間（ビデオ作品）
- ・your time /my time（プロジェクトのドキュメント映像）
- ・How uses this?(コラージュ本)
- ・Tibicklin factory（カタログ、グッズ紹介）
- ・Little tintim（手描きアニメーション）
- ・NHK出演ビデオ（ビデオ、カタログ）

→私の主なプロジェクトの説明とビデオや画像での紹介をしました。ビデオを見せるとそれまで寝ていた子ども起きてちゃんと見てくれました。作品に対する質問などは特にあがらず、でも真剣に聞いてくれました。

2. ワークショップ：「何でもないものを持ち寄って意味のあるものを作ってみよう」

こちらで用意したものと休憩時間に来てもらったほんとうにいらなくなったもの（例：ジュースのストロー、シールのがす、壊れたがさ、ぬいぐるみ、おもちゃ、布など）を使って新しい意味をもったものにつくりかえるワークショップ

- ・いらないものどうしをくっつけて何かの目的を果たすものを作る
  - ・意味のなくなってしまったものに新しいネーミングをつけてちがうものとして成り立たせる
  - ・どうしようもないものは、ある存在に想定して意味付けする
- などなど。ネーミング方法などの紹介プリントも配布しました。

→教室にバラけてみなさんが座っていたせいか、やる気満々の生徒とそうでない生徒がいました。でも、こちらから何かものを持って行けば一応考えてくれていました。

中にはとても面白いものをどんどん作ってくれた女の子たちもいたり、一つのをじっくりと友達と一緒にやって作ってくれたり、特に難しいと構えずに普段のままで楽しんでやってくれていました。

〈感想〉

授業の最後に書いてもらった感想文には、ちゃんと私の言いたかった「日常の何でもないものも、少しだけ自分の視点をずらして見直してみるだけで新しい世界観を自分で作り出すことができ、そうやって平凡な毎日に色付けしていくことは日常の暮らしの延長にあり決して難しいことではない。それを発見できるかどうかはこころがけしただ。」といったようなことも理解してくれていたことを知って、とても嬉しく思いました。寝ている生徒もいたり、興味なさそうにしている生徒もいましたが、アンケートを見るときちんと内容は聞いてくれたようで全体としていい授業だったと思います。ただ、作品の数が多かったでせいでとても駆け足な授業になったのでパタパタ感はぬけませんでした。もう少しゆとりのある授業構成をするべきだったと反省しています。



2004年5月8日(土) 洛陽高校 『生命と哲学』授業 ～つっこむことからはじめよう～  
講師：山本新紀子

#### 〈授業の流れ〉

1. はじめに：高嶋さんから簡単な紹介
2. 「自己紹介」
  - ・NHK出演ビデオ「くるっと関西おひるまえ」
  - ビデオを見つつ自己紹介 enjoy weekday project ～サラリーマン・OL編～の紹介
3. 「人と初めて出会う そのときに」
  - ・100人編集バージョン(約5分)紹介
  - みんなにうけました。さすが男子校。男の子のほうがこの手の作品はうけがいいです。
4. 「言葉が通じなくてもコミュニケーションはうまれる」
  - カナダ留学での制作活動の紹介
  - ・TIBICKLIN FACTORY →カタログとグッズ紹介
  - 実物のグッズも持って来たのでそれをみせつつ紹介。実際にみんなにまわしてみると面白そうに見ていました。
5. 「生活の中でのこころがけ」
  - ・毎日の出来事に「つっこみ」をいれることからはじめよう
  - 私の用意した何でもない2つの写真に「つっこむ」という実践の時間をとりました。



山本さんがカナダで作った作品  
nose warmer. 生徒達も大受け。

#### 〈感想〉

実践の時間にその他の作品『dairy training book』やTibicklin factoryのカタログなどをまわしてもらうとともに、私もみんなの座席の方へ回っていろいろとお話しました。みんな真剣に見たり読んだりしてくれていて、ほんとに少しでも疑問があればすぐに質問してくれました。特に『dairy training book』に関しては異常な人気で本当に驚きました。時々、個人的に話していて毎日が楽しくなればよいなといったようなことをホロリともらした生徒さんもありました。でも、彼らも彼らなりに毎日を色付けする工夫をしているようでとても興味深かったです。やはり、授業に対する真剣さや真面目さ、それと同時に素直で純粋なこともあって、みなさんのおかげでとてもやりやすい環境でした。

ただ、実践の時間を特別にとってから発表してもらおうという形をとったのですが、写真をプリントにしてそのとりに「つっこみ」を書いてもらうという形式は、

うまくしっくりいってなかったように感じ反省しています。そもそも「つっこむ」ということは、わざわざ書くという行為は向いていませんし、だからといって写真をパネルにしてみんなに見せてとどどつっこんでいってもらうという形もどうかとは思っています。もう少し事前に考慮すべきだったかと思っています。今まで見たこともなかったことに触れてもらってそのギャップを彼らなりに理解しようと努力してくれていたことをとても感じました。



# Cinephilo à Paris

特集4  
パリの  
シネフィロ報告

シネフィロ (哲学シネマ)  
とはなにか

ダニエル・ラミレズ  
訳 本間直樹

いつ、どこ  
で、どうやっ  
て？

私がシネフィロを始めたのは、一九九八年十二月、映画ファンにとてもよく知られているパリの映画館でありかつ芸術文化の拠点である

L'Entrepoce (訳注：モンバルナス地区にあるシネマコンプレクス)の協力を得て。それ以来、会は隔週で日曜午後に行われている。上映される映画は、事前に告知される哲学的テーマに関連して選ばれる。アニメータ(司会者)は映画の選択も行い、手短かな紹介の後、映画を上映し、その後隣のカフェサロンにて哲学カフェを行う。

つまり映画の上映の後で哲学の議論をする。なぜなのか？

映画は二十世紀を伴走し、そのすべての冒険、災難、獲得、喪失、偉大さ、脱線をとらに経験してきた。ありとあらゆる戦争、分裂、

喜びと不安がそこにある。一つの時代にこれほどまでにびったり密着した表現形式は珍しいだろう。映画こそまさにこの時代にとってウィクトル・ユゴーが支配芸術と名づけたものだ。古代ギリシヤにとつての悲劇、十五世紀のフィレンツェにとつての絵画、十九世紀フランスにとつての小説のように。しかも映画は、疑う余地もなく、現代の精神を世界規模で担っている。おそらく映画はこれからもずっと二十世紀と結び付けられ、以後の世紀はまた別の支配芸術によって特徴づけられるだろう。しかしそれが何かは今のところわずかに垣間みられる程度にすぎない。

私たちが経験とよんでいるものは、なにも現実には経験されたものに限らない。それは説書であるとか、私たちの幼年期から薄暗い部屋の中で見聞きしてきた映像や物語の経験でもある。それらは私たちが想像の世界の不可欠な部分だ。映画も現代の世界そして私自身に至るための特権的な道のひとつなのだ。

つまり映画とともに哲学する。でもどうやって？  
映画に真築に取り組んだ数少ない哲学者の一人、ドゥルーズ。彼が好んで口にしていたのが、映画は思考する *le cinéma pense*、しかし哲学のように概念によってではなく、映画において思考する。音楽が主題(テーマ)を音楽において考えるように。彼がそういっているのは、素朴でありがちな見解、つまり映画はテーゼやイデオロギーを挿しており、宣

言や声明として論争の対象になりうるという考  
えに対抗するためだ。

でも映画監督も考える。どのように考えるの  
か？

映像によって、より正確に言えば、動く映像に  
よって。画家が線や色を通して考えるように、音  
楽家が音や時間やフレーズやリズムの構造を通  
して考えるように。

ところで哲学は、概念、観念を用いて思考し、  
抽象的に論理を組み立て、普遍や真理を追究す  
る。しかしそれによって哲学は常に映像に対す  
る不信を表明してきた。

それはプラトンにまで遡る。彼にとっては目  
に見える(感覚)世界は真なるもの、叡智界、エ  
イドスからすでにある程度遠ざかっている。感  
覚界(可視界)はある種のミメーシス、つまり模  
倣によってイデアを分有する。したがって描か  
れた像は、それ以外の模倣芸術と同様に、真なる  
ものからさらにもう一段階遠ざかっていること  
になる。コピーのコピー、それらは欺瞞や幻影で  
しかない。すでに地中海東方では、イスラエルの  
予言者たちの告発の声が、偶像を作つてその神  
秘的な力を崇めるといふ人間の性向に対して異  
を唱えている。超越神はそれを再表現する(Pre-  
senter)あらゆる試みから逃れるというわ  
けだ。

しかしアリストテレスにとつては、模倣

(*Mimesis*)は単なる誤り、幻覚ではない。とり  
わけ悲劇においては、それは私たちが現実にな  
づくために作られる通路である。カタルシスに  
よつて私たちの溢れるエネルギー、ヒュアリス、  
情念を排出し、私たちは私たち自身、私たちの存  
在の仕方、エートスに働きかけることができる。  
この二つの世界の出会いによつてもたらされた  
キリスト教は、再表現(*Reproduction*)、聖  
像芸術、壁画と再び手を結ぶ。

以上の道のりを経て、今日ようやく主張  
することが出来る。映画とともに、映画を通して  
哲学しよう、動く映像を思考へと移し、哲学の議  
論によつて、思考を言葉の共同実践へと移行さ  
せよう、と。

もちろん、映画クラブや無数の雑誌があり、映  
画の評論家や理論家がいる。それらの目的は映  
画を考える、映画について考えること、映画作品  
や映画作家について考えることだ。確かにそれ  
らは私たちが夢中にさせるが、いまの私たちの  
関心事ではない。そのうえ、そうした人たちは映  
画に精通しているので、反省の手段として哲学  
を必要としていない。まさにそこにシネフィロ  
という概念の正当性がある。シネフィロでは、他  
の人々とともに哲学を実践し、様々な概念に出  
逢い、言葉によつて思考の道行きを共にする。も  
ちろん、それは厳密さ、方法、知識を必要とし、  
同様に、精神を開き、他者からの言葉の到来に耳  
を澄まさないなければならない。



パリの名物カフェ、Café des Pharesで哲学カフェをアニメート  
するラミレス氏(中央)

ところで、映画を観に行くという経験は特別  
なものだ。しばしばそれは孤独な行動であり、観  
客は「リアリズム」の映像や音とリズム、とくに  
感情の波に呑み込まれる。もし本当に偉大な映  
画作品が考えることを要求するとしても、孤  
独な観客にとつては哲学の位置に身を置くこと  
は難しい。

哲学者なら誰でも、映画館の「暗いホール」と  
プラトンの国家篇のかくも有名な第七巻の洞窟  
の比喩とを比較せずにはおられないだろう。そ  
の記述は映画の到来を予告するものだ。人々

「プラトン」とつては囚人、私たちにとつては観客——は洞窟に住んでいて同じ方向しか見ることができず、その背後に置かれた火——投影機——が人々の背後でうごめく様々なものの影を目の前の岩壁——スクリーン——に映し出す。ただし人々は子ども頃からそこに鎖で繋がれているので、映し出された像を唯一の現実と思うしかなく、外の世界が存在すること、あるいは「これは映画だ」ということを知らない。

この中の世界と外の世界のあいだで演ぜられるものとはときとして「映画世界 cinématographique」と呼ばれる。現代の観客は外の世界、「現実の世界」（そう呼ぶのは正しいのか？）が存在することを知っている。私たちは外に出て、ただちに日々の関心事に戻り、「用事」を再開する。映画館で私たちは現を抜かしていた、パスカルの意味で「気晴らし」をしていたのだ。しかし映画はただちに私たちの潜在意識に滑りこみ、記憶ないし忘却に変わる。その後それは断片的なかたちで会話の中に再び現れる。また「最近見た映画」はビストロに集う仲間どうしの格好の「話題」だ。読みかじった批評や雑誌の解説に基づいた価値評価を交えて言葉が交わされる。そして再び、半は忘却されたかたちで、反省を加えられなまま私たちの経験織り成す一本の横糸となる。

映画の後にカフェイロを行うことによつて私たちは映画上映と日常世界との間の幕間を設

ける。この幕間はまた出逢いの時、言葉を共有する場でもある。観客はその役目上、黙つて受け身のまま見、聞き、受け入れる。しかしカフェイロの参加者となれば、能動的なり自分を取り戻す。したがつて議論は単なる娯楽ではなくて、思考に通ずる場所となる。

そういうわけで、——しばしばそうしよう求められるだけけれども——上映室で議論することに対しては私はいつも反対する。そうしてしまつと、私たちはみな洞窟の中の囚人たちのように、いまや真っ白になったスクリーンへと釘付けにされたまま、それを背景に突然「舞台」に現れたアニメータを目にすることになる。それでは受け身の状態から抜け出す理由のない参加者たちと水平な関係をもつことは不可能だ。

洞窟からの象徴的な脱出のように、映写室からの脱出は本質的だ。つまり、わずかに明かりのともされた廊下を通じて階段をのほり出口まで歩み、数分間の沈黙とともに私たち自身に出逢う。シネフィロは、映写室から出るとても特別な瞬間と、街角への出口の間に位置する、思考へと開かれた時間だ。それは、世界や私たち自身について何ごとかをあらためて理解し、現実を生のまま把握するチャンスだ。

映画のなかには、しばしば隠れたかたちで、ハイアガーが「先行理解」と呼んでいたものがある。私たちはそれに語り出させるのだ。

私たちの前に、行動、争い、ドラマ、愛、死、



人間の偉大さや惨めさのさなかにある人々の物語や人生が繰り広げられる。ところで、カフェイロでは、個人的で具体的で「ノンフィクション」である部分と、諸観念、普遍的なもの、抽象的なものとのあいだの方程式を解くことはなかなか困難だ。問題となるのは、単に例（個別）と理論（一般）のあいだの対立だけではなくて、体験されたことと哲学的な思考のあいだの弁証法である。

シネフィロでは、個別的なものが私たちの目の前で映画として繰り広げられる。この個別経験的なものは分析に適している。なぜならそれは何らかのかたちで二重化されているからだ。つまり、私たちの立ち会う映画の登場人物の経験と、そして映画を観ている私たちの個人的経験とに。私たちは、哲学とその方法の助けを借り

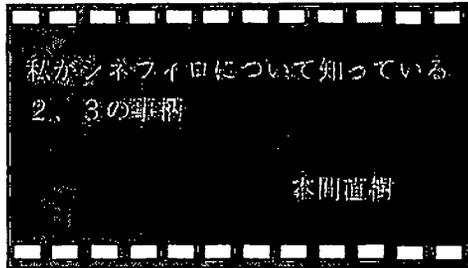
て、いくつものケース、人生の諸断片、感情、映像を通り抜けて、概念に向かう思考の道のりを見つけなければならぬ。

どんな映画？

映画は人生と同じだけ多種多様だ。哲学が有る特定の「主題」に限定されないように、シネファイロも一つのジャンルに限定されない。だから作品はあらゆる種類、あらゆる時期に属する。偉大な古典作品や優れて哲学的で、形而上学的でもある作品（ヘルイマン、ルネ、黒澤、タルコフスキ）、ドキュメンタリー、政治映画。若手作家の新作たちは、私たちの視線をより現代的な現象に向けさせてくれるし、アフリカや東洋、南アメリカの珠玉の作品たちは、私たちの文化的背景から異なった世界観を目の当たりにさせる。SF作品は、それに対するありがちな先入観にもかかわらず、未来の世界についてのみならず現在進行形の世界についての刺激的な問題を提起してくれる。

そのままで哲学的とはいえない映画を哲学的に理解すること、おそらくそれは本来の目的である人生を哲学的に理解すること——それがなければ哲学は時間の無駄づかいになってしまう——よりも容易で近づきやすいだろう。おそらくシネファイロは哲学のための準備運動として理解することができるだろう。

ダニエル・ラミレス Daniel Ramirez  
チリ出身のフリーの哲学者。マルクソーテの誘いにより、カフエ・テ・ファールのアニメーターを務めるほか、バリ内外にて哲学カフェ、哲学セミナーを開催。プロのフルーティストでもある。



シネファイロは

面白い——これが最初の感想。私はバリで多くの哲学カフェを経験したが、これといった方法論もないまま、司会者の力技がなければカオス状態に終わってしまう後者に比べ、シネファイロでは人々はスムーズにテーマに集中し、ゆっくりではあるが映画の核心部分とそれを支える種の観念に触れることができる。どうしてだろうか？

ラミレス氏が適確に述べているように、映画をみることはまさりもなく一つの経験だ。哲学カフェにはそれが欠けている。有り体に言えば、方法論なしの哲学カフェは参加者の「妄想」の捌け口となる。それは具体的な経験でも明確な概念でもない混乱した観念だ。そもそも自分の経験を距離をおいて記述することは難しいうえに、さらに事後的に多数で共有することは一層困難だ。そのためには文学的な能力や聴取る技法が要求されるし、自分の経験を曝し出す発言者にもリスクがかかる。

参加者の具体的な体験の記述をもとに議論する「(ネオ)ソクラテスの対話(ソクラテイク・ダイアローグ)」という方法がある。人々が魅了されるのは、言葉による経験の記述の層とそれを支える諸観念の層が見事に析出される瞬間がそこに生じるからだ。うまくいったシネファイロには同様のことが、いやそれ以上を見いだすことができる。まず参加者全員が二時間ほどの経験を共有する。これはソクラテスの対話にはないメリットだ。そして映画の後で参加者が映画を言葉で記述する。それは解釈学的な作業であり、一つの動作、一つの映像を理解するための解釈や観念の枠組みが問われることになる。もちろん司会者の技量によることも大きい。カフエファイロ的な漂流ないし空中戦にならないのは、準拠すべき経験が厳然とそこにあるからだ。題材なしの哲学的対話が終わるとするに忘却さ



パリ留学中の本間講師と愛犬まめ

れてしまおうのに対して、映画の経験そのものは  
その後も私たちの経験の一部として生き続ける。  
それだけに上映直後のこの時間は経験の吟味す  
る哲学にとって大変貴重なのだ。

もう一つ比較のためにパリでしばしば開かれ  
る映画作家を招いての上映会をあげておこう。  
観客にとっては映画作家は文字どおり「創造主」  
の位置にあり、両者の間に交わされる言葉は一  
方通行で、発言内容も良くも悪くも「マニアッ  
ク」だ。撮影の苦労話や作家の意図などを聞くに  
ついても、一度出来上がった作品にとって作家  
はもはやその「外部」に位置するのだと思いきら

される。

ところで、私のたつての希望で、是枝裕和監督  
作「ワンタフルライフ」のシネフィロが実現し  
た。死後に天国に向かう中継地点で死者たちが  
生前の一瞬を選択し、それ映画によって再現し、  
その映像の記憶をもって彼ら彼女らは昇天する。  
「人生」と「映画」の並行関係を見事に描き、「一  
つの瞬間を永遠に生きる」というきわめてニー  
チエ的な主題を扱った作品ではあったが、よく  
理解できなかつた観客も多かつたようだ。キリ  
スト的世界観をもつ参加者の一人は、人生はよ  
り幸福な未来向かうプロセスであり、一瞬だけ  
を選ぶことはナンセンスであると主張し、別の  
参加者は、どうして死を迎えた後の人たちがな  
ぜあのように平然としているのかが分からない  
と述べていた。

蛇足ながら、最後にパリの哲学カフェ事情に  
ついて一言。正直なところ、パリの哲学カフェは  
病んでいる。より正確には、動けないでいる。哲  
学カフェの数は減少し、参加者は固定している  
うえ（多くは定年退職者）、参加者が平等に発言  
できることはいまや検証の必要のないイデオ  
ロギーになり、司会者の技術や方法も吟味や評  
価のないまま個人芸に終わっている。大学の職  
業哲学者はカフェフィロを見下し（無視し）、カ  
フェフィロフリークは「知識人」を毛嫌いしてい  
る。（ラミレス氏は哲学の方法と理論を重視し、  
哲学カフェの社会のなかでの機能を考えるべく

例外的な存在だ。）大学の専門家が音頭を取って  
カフェフィロを聞くという日本の現状は彼ら彼  
女らにとっては驚愕の対象であるといつてよい。  
しかし、今後哲学カフェをどこで、どのような方  
法論で、どのような人たちと行うのか、私たちの  
課題は大きい。

（ほんまなおき）